

日本語とジェンダー

vol. XIII 2013

【第13回年次大会 基調講演要旨】

私の日本語ジェンダー体験 樋口 恵子

【第13回年次大会 シンポジウム：メディアの中でジェンダーはどんな姿を見せているのか 要旨】

朝日新聞の用語に見るジェンダー意識の変化 松沢 明弘

歌の中でレフレインされるジェンダー意識 佐々木 瑞枝

子供の本などにおけるジェンダーとジェンダー解消の試み 谷口 秀子

【第13回年次大会 対談：メディアを通して見るジェンダーバイアス 提題要旨】

映画・ドラマ作品を通して見るジェンダーバイアス 因 京子

Gender Bias in Media -Hope We Can Do Something about It Reynolds Akiba Katsue

【第13回年次大会 研究発表要旨】

メディアリテラシーとジェンダー

——メディアのマルチモダリティ分析を通じた意味構築—— 岡本 能里子

【国際大会2013 in ウクライナ 講演要旨】

ノンバーバルコミュニケーション服装から浮かぶ日本語キーワード 佐々木 瑞枝

【国際大会2013 in ウクライナ シンポジウム：翻訳から見たジェンダー表現の諸相 要旨】

翻訳におけるイノベーションと想像力のインタープレイ ジュディット・ヒダシ

翻訳における不可と削除 矢野 安剛

【国際大会2013 in ウクライナ 研究発表 要旨】

ウクライナ語訳三島由紀夫『サド侯爵夫人』における女性語表現 江川 裕之

【研究ノート】

会話文末における「男ことば」と「女ことば」の分類：ジェンダー識別傾向とジェンダー特異性を指標として 有泉 優里



日本語ジェンダー学会

日本語とジェンダー 第13号 目次

【第13回年次大会 基調講演要旨】

私の日本語ジェンダー体験	1
樋口 恵子	

【第13回年次大会 シンポジウム：メディアの中でジェンダーはどんな姿を見せているのか 要旨】 朝日新聞の用語に見るジェンダー意識の変化	4
--	---

松沢 明弘

歌の中でレフレインされるジェンダー意識	8
佐々木 瑞枝	

子供の本などにおけるジェンダーとジェンダー解消の試み	11
谷口 秀子	

【第13回年次大会 対談：メディアを通して見るジェンダーバイアス 提題要旨】

映画・ドラマ作品を通してみるジェンダーバイアス	14
因 京子	

Gender Bias in Media -Hope We Can Do Something about It	21
Reynolds Akiba Katsue	

【第13回年次大会 研究発表要旨】

メディアリテラシーとジェンダー ——メディアのマルチモダリティ分析を通じた意味構築——	23
岡本 能里子	

【国際大会 2013 in ウクライナ 講演要旨】

ノンバーバルコミュニケーション服装から浮かぶ日本語キーワード	29
佐々木 瑞枝	

【国際大会 2013 in ウクライナ シンポジウム：翻訳から見たジェンダー表現の諸相 要旨】

翻訳におけるイノベーションと想像力のインタープレイ	42
ジュディット・ヒダシ	

翻訳における不可と削除	44
矢野安剛	

【国際大会 2013 in ウクライナ 研究発表要旨】

ウクライナ語訳三島由紀夫『サド侯爵夫人』における女性語表現	56
江川裕之	

【研究ノート】

会話文末における「男ことば」と「女ことば」の分類：ジェンダー識別傾向とジェンダー特異性を指標として	61
---	----

有泉優里

日本語ジェンダー学会第 14 回大会のお知らせ.....	71
日本語ジェンダー学会会則	72
日本語ジェンダー学会役員名	73
日本語ジェンダー学会入会申込書	75
Regulations of the Society for Gender Studies in Japanese	76
Officers of the Society for Gender Studies in Japanese	78
Application for Membership	80
執筆要領	81

編集後記

【第 13 回年次大会 基調講演 要旨】

私の日本語ジェンダー体験

樋口 恵子

「ごめんあそばせ」の中学時代

私は戦前の 1932 年生まれ、80 歳です。東京の大学教師という、お金はありませんが、まずは中流家庭で育ちました。幼時期から女の子へのことばづかいのしつけはかなり厳しかったと思います。そもそも父は母を「おい」と呼び、代名詞は「おまえ」でした。母は父を私たち子どもと同様「お父さま」と呼び、「～なさいますか」「おっしやったとおりに致しました」と敬語を使い、それがあたりまえと思って育ちました。私の年代は中学校からが戦後です。高校は活発な少女の集団でしたが、先生が出欠をとるとき隣席がお休みだと「欠席でございます」と言い、廊下でぶつかると「ごめんあそばせ」と言い合い、それも不思議とは思いませんでした。もちろん女の子だけに対することばづかいのしつけでした。

呼び捨ての英語文化に驚く

ことばの上下関係、男女の違いに気を留めたのは中学で英語を学び出してからです。1 人称 2 人称代名詞が I と You にだけというのは驚きでした。男女の区別がつきません。さらに高校で、気鋭の女の先生が、ラム兄弟『シェイクスピア物語』を副読本に使い、そこで私の驚きは決定的になりました。王も王妃も臣下も代名詞はほとんど同じ、それどころか、夫と妻もおたがいに、日本流に言えば“呼び捨て”で語り合っているではありませんか。ハムレットに対してオフィーリアは恋人であり貴族の娘かもしれませんが、何と言っても相手は王子様。こちらは臣下のしかも女。日本の常識では二重に格差があるはずなのに、畏れ多くも「ハムレット」と呼び捨て。『オセロ』も、妻のデスデモナが夫を呼ぶとき日本語訳では「オセロ様」と訳されているのに、原文は「オセロ」と呼び捨てです。『ロメオとジュリエット』の若い恋人同士も「ロメオ」「ジュリエット」と呼び合っています。

私の世代が結婚したのは、戦後も十年以上を経た 1950 年～60 年代でしたが、結婚して妻が夫を呼ぶときは「さん」付け、夫は妻を呼び捨て、舅姑は嫁を呼び捨て、という例が多かったと記憶しています。夫と妻が固有名詞を呼び合うのは日本の夫婦には座りが悪いらしく、子どもが生まれると「パパ、ママ」「お父さん、お母さん」と呼び方が変わり、ここで夫婦がある意味で対等になるのです。

ことばの性別をめぐる教科書問題

女ことば・男ことばが、男女平等とのかかわりで語られるようになったのは、やはり世界にひろがるフェミニズムの波を受けて国連が 1975 年を国際婦人年と定めたころからだと思います。初期には国文学者・寿岳章子の著作があり、女性学の一分野として取り組む研究者が出てきました。市民レベルでは、母親や教職員による教科書点検運動がひろがりました。私の関与した限りでは「国際婦人年をきっかけに行動する女たちの会」の教育分科会が熱心に取り組み、教科を問わず、さし絵や例文でのステレオタイプな男女の取り上げ方などを指摘していました。私が見た例でも、保健体育の表紙裏に「人体解剖図」として男子だけしか載っていないので、びっくりしたことがあります。女子は本文の中に小さく掲載されていましたけれど。

そのころ私のはからずもかかわった、女ことば・男ことばが女性の存在を消去しそうになった

事例を一つお話ししましょう。舞台はやはり教科書。主役は女教師。ときは 1982 年のことです。1980 年には、国連が女子差別撤廃条約を作成してデンマーク・コペンハーゲン会議で発表、日本の代表も批准への決意表明を示しました。5 年後のカイロ会議での批准宣言に向けて、日本政府も男女雇用機会均等法制定や家庭科男女共修実現などに向けて大わらわで取り組みはじめたころのことでした。

1982 年、私は神奈川県の小田原市の講演会に呼ばれ、そこで少し前に小学校教師を定年退職し、久しぶりに紅一点の女性市議員に選ばれたという女性から話しかけられました。今だったら当然校長先生になっていた方だと思いますが、当時は女性の優秀なベテラン教師でも学年主任止まりがほとんどでした。

この先生、どちらかと言えば保守的な体育系。6 年の学年主任として一組の担任となり、最後の年を迎えました。世の流行語は「もやしっ子」。運動不足で陽の当たらぬ場所でひょろひょろ育つような子どもにはしたくない。先生はホームルームで子どもたちに「この一年みんなでマラソンして大阪まで行こう」と提案、子どもたちも大乗り気で取り組むことになりました。学校は長い直線距離が取れる河川敷のそばにあります。途中だれる日もあるのですが、先生の巧みな誘導で、ついに全員が大阪どころか博多までたどりつき、最後の一人が走るときは全員が併走して感動を分かち合う、というハッピーエンドとなりました。これをクラスの女子の一人が作文に書いたのですが、学校文集に掲載されたその文章が教科書編集委員の目にとり、最もシェアが大きい教科書会社の 6 年下巻に収録されることになりました。

定年直前の教壇から得たこの名誉。先生も学校も大喜びで先生は間もなく生まれる初孫にも伝えたいと楽しみにしていました。途中、教科書会社から「若干の手直しをする」と連絡がありましたが、全国に標準化されるのだからごもっとも、と内容は聞かず了承したそうです。

「男」にされた熱血先生

そして送られてきた白表紙本。白表紙本というのは、表紙はこれからですが、内容的にはきびしいと言われる文科省検定を通ったということです。期待に満ちて頁を繰った先生は、呆然としました。

「私がない！」「私は男にされてしまった！」

児童の作文の中では、先生は「先生」で男女の別は指定されていません。しかし会話の中で明らかに女の先生と思わせる二つの語尾がありました。一つは、だれてきた子どもたちをたしなめる「みんなもうあきてしまったの」。もう一つが最後の結論「マラソンは自分自身とのたたかいなのよ」です。この会話が「もうみんなあきたのかい」「マラソンは自分自身とのたたかいなのだ」に変わっていたのです。女ことばと男ことばの違いは、代名詞や敬語に加えて、日常会話では語尾に大きな違いがあります。方言ではあまり違いがない地域があり、最近の若い世代はあまり差がなくなっはいますけれど。ひらがなにすればたった数文字で、前者は中年のしっかり者の女の先生、後者ではごつい男先生のイメージが浮かび上がってきます。

「どうも納得できないけれど、女はすぐイチャモンをつけると言われたくないし」と先生はかなり悩んでいましたが、結局、東京にいる私に、教科書会社に理由を聞いてほしい、ということになりました。

教科書会社は自信満々で会見に応じました。2～3 人の仲間とともに訪れた私たちに「意識的に男の先生に変更した」と言明しました。

理由①低学年で女の先生を出し過ぎたので 6 年のしめくくりには男の先生を出したい。

理由②マラソンは伝統的に男子の競技であり男の先生が指導するのが自然である。

理由①のほうは、5年生までの教科書をその場で調べたところ約50%で、現実の女教師の性比をやや下回り、決して「出しすぎた」わけではないことがわかりました。

理由②は問題です。たしかにマラソンは伝統的には男性の競技ですが、ちょうどそのころオリンピック競技種目に次回オリンピック、つまり1984年ロサンゼルス大会から女子マラソンが正式種目となることが決定していました。さらに、それに先立って、世界の公式記録に初めて認められることになった「東京国際女子マラソン」が1979年賑々しく開催されるという、その直後のできごとだったのです。

「伝統は大切にすべきですが、事実は時代を映して時々刻々変化し、新たな伝統を紡ぎ上げ加えています。未来を生きる子どもたちの目を、そんな動きから背けていいのでしょうか」「そもそもここでいうマラソンは競技のマラソンのようなタイムレースではありません。それぞれのペースで目標を達成しようという一つの学習活動です。どうして男の先生でなければいけないのでしょうか」

女も男もあるがままでいられる表現を

私たちの質問に会社側は返すことばがなく、「検討させてください」。しばらくして「児童の作文をもとにした教材でありながら必要以上の改正を加えすぎた」と理由書をつけて、再検定を取り直し、先生は個人的には自らの女性というアイデンティティを取り戻し、社会的には女性の存在そのものを回復しました。教科書会社も良心的に対応してくれたと思いますが、ほかにも、ホームルームで提案したとされる児童を「○○くん」と表記し、いかにも男の子がリードしているように見せるとか、たしかに、「必要以上の改正」がありました。

教科書の一応の規定では、女の子が相手と呼ぶときは、男女を問わず「さん」と決まっていて、「くん」は男同士の関係でのみ使われます。そう言えば、国会では議長が発言議員を呼ぶときはすべて「くん」でした。男しか議員がいなかった時代の名残でしょう。土井たか子さんが参議院議長になったときは、全員を「さん」で呼び話題になりました。

ことばも文字もまさに昔々からの文化遺産ですから、あまり窮屈に考えるとあれもこれも差別だろうか、というおそれが出てきて表現が貧しくなることもあり得ます。しかしここでお話ししたように、語尾を換えただけで、無断の性転換手術が行われたり、現に存在する女性を消去するような男ことば、女ことばの使い方には厳重に注意する必要があります。女も男も、その存在があるがままに表現されますように、かつ未来志向を忘れませんように、と祈りつつ私の話を終わります。 ご清聴ありがとうございました。

(樋口恵子 ひぐち けいこ 東京家政大学名誉教授)

【第13回年次大会 シンポジウム:メディアの中でジェンダーはどんな姿を見せているのか 要旨】
朝日新聞の用語に見るジェンダー意識の変化

松沢明広

1. 朝日新聞の用語取り決めとジェンダー

1988年12月、用語などの「取り決め集」に「性差別語」の項目が加わる。

- ・使わない：未亡人、女傑、女丈夫、女ごときが、女のくせに、女だてらに、女ながらも
- ・特に必要なとき以外は使わない：女流作家、女流画家
- ・なるべく言い換える：主人、亭主

2002年10月、「取り決め集」に「ジェンダー」の章を設けて内容を充実させる。

死亡記事の敬称を「さん」に統一（それまで女性「さん」、男性「氏」だった）。

11月、「ジェンダーガイドブック」（具体例を挙げたもの）を作って配布。

（男女のいずれかに偏った表現、性別役割分業などに注意する。性的少数者への配慮）

- ・女房役、嫁ぐ、女教師、女医、女社長など
 - ・処女作、女史（98年から）
 - ・看護婦、助産婦、保健婦、保母、スチュワーデス
 - ・「～よ」「～だわ」など
 - ・男の割に、男にしては、男気あふれるなど
- （いずれも、「なるべく使わない」「極力避ける」などとした）

2. ジェンダーに関わる言葉の使用頻度

朝日新聞記事データベースに収録されている1984年8月からの記事（「週刊朝日」「AERA」を除く）を、下のようにはぼ10年ずつ3期に分けて、用語の使われる頻度を調べた。

①1984年8月－1993年②1994－2002年③2003－2012年4月

※全ての紙面が収録されているわけではなく、段階的に対象が増えている（たとえばスポーツ面は93年から）ため、①は少なめになる傾向がある。

※記者以外の、社外の筆者によるものは、必ずしも取り決めに従っているわけではない。

（1）1988年の取り決めに取り上げられた言葉

	1984－1993	1994－2002	2003－2012	合 計
未亡人	7 3 9	2 2 1	1 2 5	1 0 8 5
女傑	3 1	6 3	5 0	1 4 4
女丈夫	1 0	1 4	1 4	3 8
女だてらに	2 1	2 7	1 8	6 6
女流作家	1 6 9	1 5 3	9 4	4 1 6
女流画家	1 1 9	1 0 9	8 5	3 1 3

（2）2002年の取り決めに取り上げられた言葉

	1984－1993	1994－2002	2003－2012	合 計
女房役&野球	4 5	1 7 5	2 4	2 4 4

女房役&官房長官	8 4	3 4	8	1 2 6
女教師	1 6 1	1 4 9	6 7	3 7 7
女医	3 5 1	5 2 3	2 4 6	1 1 2 0
女社長	2 4	2 6	2 1	7 1
処女作	2 5 1	9 8	6 1	4 1 0
女史	1 8 0 5	3 2 1	9 2	2 2 1 8

※女房役＝古典芸能、芝居などの記事以外の「野球の捕手」「首相に対する官房長官」の用例。

(3) 正式名称が変わるなどして使われなくなってきた言葉

	1984－1993	1994－2002	2003－2012	合 計
看護婦	6 8 1 9	1 6 9 1 5	7 5 5	2 4 4 8 9
看護師	1	1 4 7 6	2 1 9 1 9	2 3 3 9 6
助産婦	5 5 0	1 6 3 3	1 4 0	2 3 2 3
助産師	0	1 5 6	2 5 0 1	2 6 5 7
スチュワーデス	8 1 1	1 0 3 9	9 5	1 9 4 5
客室乗務員	1 5 6	8 3 3	1 6 1 2	2 6 0 1

※保健婦助産婦看護婦法改正で名称が変わったのは、2002年3月1日から。

(4) 取り決めに明示していない言葉

	1984－1993	1994－2002	2003－2012	合 計
ママさん選手				
ママさんランナー	6 6	8 9	1 0 0	2 5 5
男泣き	9 0	1 1 2	1 2 9	3 3 1

3. 記事の具体例

★未亡人

フルシチョフ未亡人が死去 (1984年8月22日)

故フルシチョフ・ソ連共産党第1書記兼首相の夫人、ニーナ・ペトロブナさんが、8日夜、84歳で死去。

ヨーコさん長者番付上位 (1984年9月19日)

故ジョン・レノンの未亡人ヨーコ・オノさんや爆発的な人気のポピュラー歌手、マイケル・ジャクソン氏は米国で有数の大金持ち...

感慨新た谷崎未亡人 (1984年10月13日夕刊)

「谷崎が今、ここに戻ってきたようです」。神戸・三宮のそごうで12日開幕した生誕100年記念「谷崎潤一郎・人と文学」展に松子未亡人(81)が訪れ...

コラソン女史、出馬 会見で正式表明 比大統領選 (1985年12月3日夕刊)

フィリピンの繰り上げ大統領選でベニグノ・アキノ元上院議員未亡人コラソン・アキノ女史(52)は3日午前、マニラで記者会見し、反マルコス大統領候補として出馬することを正式に表明した。

★女流作家

有吉佐和子さんをしのび、通夜に300人 (1984年9月4日)

急死した女流作家、有吉佐和子さんをしのぶ通夜が、3 日午後 6 時から東京都文京区関口 3 丁目の東京カテドラル聖マリア大聖堂で行われた。

(訃報) アーシュラ・ブルームさん (1984 年 10 月 31 日夕刊)

英女流作家。30 日、英国南部の養老院で死去、91 歳。8 歳で物語を書き始め、1924 年に処女小説「偉大な滑り出し」を発表して以来...

★女房役

首相と武村氏 深刻ではない 佳代子夫人が解説 (1994 年 2 月 22 日)

細川首相の夫人、佳代子さんが.....「二人とも党首。意見が違えば主張する。しかし、それで亀裂が深まっているとは武村さんも思っておられないだろうし、仲良くやっています」と強調した。夫の「女房役」をかばうのも内助の功といったところ？

小渕氏の盟友、女房役を続投 青木官房長官 (2000 年 4 月 6 日)

小渕恵三前首相の「女房役」として小渕内閣を支えた青木幹雄官房長官が、森内閣でも同じ役割を務めることになった。

1 年生「女房役」、先輩リード 練習中もメモ、研究怠らず (2000 年 8 月 11 日夕刊大阪本社版)

岡本君は今大会で 1 人しかいない 1 年の正捕手。3 年の先輩投手 2 人の「女房役」を務める。

★女社長

「フォション」焼け 2 人死亡 パリ (1985 年 12 月 21 日)

パリ・マドレーヌ広場に面した有名食料品店「フォション」で 20 日午後 1 時ごろ、火災が発生...焼け跡から、「フォション」の女社長ジョゼット・ゲルミノさん (61) とその娘の 2 人が焼死体で発見された。

青山・女社長の株券偽造 融資は十数億円 (1989 年 4 月 15 日夕刊)

東京・南青山の女社長らによる大正製薬の株券偽造事件を捜査している警視庁捜査 2 課と目白署は...

★その他

三井マリ子さん 都議補選で当選した土井委員長直系のマドンナ (1987 年 4 月 14 日)

「ご主人は」と問うと「ウチにはつれ合いがおり、私も主人よ」。脱サラ、弁理士の夫は今回裏方で「演説もうまくなったし、政治に向いているね」と内助の功の弁。

いい顔見たい 家族も後押し アテネ五輪まで 50 日 (2004 年 6 月 22 日)

(女性選手、特に既婚選手の増加に注目した特集)

バレーのセッター辻知恵 (34) =旧姓名取、茂原=が日本初のママさん選手として代表入りしそう。クラブチームで練習を続けるサッカーのMF 宮本ともみ (25) =旧姓三井、伊賀=は職業欄に専業主婦と書き込む。

「二つの名で世界一に」 柔道・谷亮子

「女性として生まれ、結婚し、名前が変わる。一人の人間が二つの名前をチャンピオンの欄に残せるというのは、すごく魅力的なことですよ」

夫に励まされ、9 年ぶり復帰 バレーボール・辻知恵

9 年ぶりの全日本復帰は、2 歳になった息子の真一郎君と、離ればなれの毎日だ。「いくら選手として評価されても、母親失格なんじゃないかと.....」

妻や母としての生活をどうするか。悩む背中を、夫の言葉が押してくれた。「バレー人生の締

めくくり、皆の役に立てるなんて最高だぞ」。息子は保育園に通い始めた。幼いなりに「母ちゃんはバレーのお仕事」と我慢している様子を聞くと、この時間を無駄にしてはならないと身が引き締まる。

長身MF、主婦の顔も サッカー・宮本ともみ

夫は三重・上野消防署に勤務する消防士だ。「家にいる時は弁当作りを欠かしたことがあります」。宮本ともみの朝は台所に立つことから始まる。99年、所属チームの親会社が撤退。以来、サッカー選手としての収入は途絶えた。今は主婦業と練習の傍ら、週4日ほど洋菓子店でアルバイトに励む。「気分転換になるし、生活費の足しにもなる」。プレー同様、主婦としても堅実だ。

女王ヒンギス、プレーに余裕 「勝つ自信はあるわ」(2001年2月4日)

「0-3 となった時点で、頭は次のセットのことを考えていたわ」「今年初めの対戦は勝っているし、自信はあるわ」

ペア解消？(同日) 全豪オープン準決勝に続いてランク下のペアに敗れた杉山は「悔いが残ります」

(松沢明弘 まつざわ あきひろ 朝日新聞東京本社校閲センター)

【第13回年次大会 シンポジウム:メディアの中でジェンダーはどんな姿を見せているのか 要旨】
歌の中でレフレインされるジェンダー意識

佐々木瑞枝

1. はじめに

子供によって歌われることを目的として作られた創作童謡には、子供の口を通して無意識にリフレインされている。その内容には自然発生的に伝承されてきた「童歌」とは異なる、「大人の「識見」による隠れたカリキュラム」が織り込まれている。

下記に挙げた曲で一人称の呼称である「ぼく」が「私たち」を代表するものは「汽車ぽっぽ」や「線路は続くよどこまでも」など数多く、それに対して男女共に使える呼称である「私」や「私たち」が使われている童謡は驚くほどに少ない。「やさしいお母様」の歌詞は「私がおねむになった時」と「私」が使われているが、実際にはかわいい女の子のイラストが歌詞に添えられていることが多く、「私」には男性は含まれていないと感じる子供たちが多いのではないだろうか。

曲名	表記
【男の子】	
雨ふり かあさん	ぼくのを
お月さんと坊や	かわいい坊やと
おばけなんてないさ	ぼくだってこわいな
汽車ポッポ	ぼくらをのせて
さっちゃん	ぼくのこと
線路はつづくよどこまでも	ぼくたちの
手のひらを太陽に	ぼくらはみんな
とんがり帽子	おいらの家よ
どんぐりころころ	坊ちゃん一緒に
ないしょ話	坊やのおねがい
バスの歌	ぼくも左へ
ひょっこりひょうたん島	ぼくらを乗せて
ぼくはごうけつだい	ぼくはごうけつだい
マーチング・マーチ	ぼくをはこんで
ママが赤ちゃん	僕にも だっこ
もえあがれ雪たち	ぼくらの 街に降る
われは海の子	われは海の子

【女の子】	
赤い靴 女の子	異人さんに
赤い帽子 白い帽子	いつも通るよ女の子
青い眼の人形	日本の嬢ちゃんよ
人形	わたしの人形は
森の熊さん	お嬢さんお逃げなさい

【差別？ なし】

アイスクリームの歌	王子でも王女でも
秋の子	一、二の三人
あの子はだあれ	かわいい美代ちゃん、隣の健ちゃん
歌の町	よい子が住んでる
おはなし指さん	この指パパ、この指ママ
こたりの歌	かあさんよぶのも、とうさんよぶのも
ちいさい秋みつけた	誰かさんが
ドロップスの歌	こどもがなめます
へのへのもへじやーい	そうそうあの子
やさしいおかあさま	わたしがおねむに
夢のお馬車	可愛い姫さま 王子さまを

2. 「隠れたカリキュラム」としての「童謡の歌詞」

学校教育で、家庭で、子供の世界で繰り返し歌われる「童謡」の中にセクシズムが浸透し、「隠れたカリキュラム」として子供たちに歌われ続けている。そしてその歌詞を書いたのは男性の作詞家が大部分であり、作詞家自身も、「僕らを乗せて…」という歌詞の中にジェンダーバイアスがあると意識もしない。そして「性差別イデオロギー」は再生産されているのではないだろうか。

中村桃子（1995）は「社会には性差別イデオロギーを表現しているディスコースがあふれている。しかしそれらが「人間は男だけだ！」「女は性の対象物だ！」と性差別を直接表現している場合は非常に少ない。むしろ「性差別イデオロギー」を既に常識となった当然のことと仮定し、性差別イデオロギーを生産している場合が多い」と述べている。

童謡での呼称の「僕」はその典型的な例と言えないだろうか。高度成長時代を経て、キャリアウーマンが増え、その子供たちはどんな歌を歌って育つのだろうか。レコードやラジオ、そしてテレビやCDとメディアの媒体は変化しても子供たちの歌は歌われ続ける。NHKの長寿番組「お母さんと一緒」でも、「知ってしまったぼく」（作詞・あきやまただし・作曲・松本雅隆）という歌が歌われているが、その歌詞の内容は、昨日まではいろいろなものをこわがっていた「ぼく」だけど、見てよ、もう何もこわがらない「ぼく」に変わったよ、というものだ。

作詞家の意識が変わらない限り、そしてそれを放映するテレビ側の意識が変わらない限り、このような歌は「性差別」に何の問題もなく、むしろ「男の子」が勇気ある子供に育つように配慮された良質の歌として存在するのだ。

3. イデオロギー再生産装置としてのカラオケ

パイオニアのカラオケ白書によれば、一日あたりのカラオケ歌唱人口は 630 万人にものぼり、日本社会における娯楽文化の一つとして無視できないものとなっていることは確かだ。（佐々木 1995）

その中でも男性が女性言葉で歌う歌謡曲には、男性がのぞむ「女性の生き方」が隠れた装置として内在する。

「私バカよね」を繰り返すフレーズで知られる「心のこり」（作詞・なかにし礼、作曲・中村泰士、歌・細川たかし）。昭和 50 年に作られたヒット曲だが、今でもカラオケボックスでは人気の歌の一つだそうである。

たった 4 行のフレーズの中に呼称の「私」から始まって、「よね」という終助詞で女性を表現し、

「女性は『あなた一人』に命をかけるもの」という倫理観（差別感）を朗々と歌い上げ、最後に「女が耐えることは美德である」と結ぶ。こういった類の歌が一日に何回も小さなカラオケボックスで歌われ、最近では通信販売を通じて家庭で歌われ、歌の歌詞は再生産されていく。

次の文はコミュニケーション場面での「察し用法」について書いたものであるが、上記の歌の歌詞にも当てはめることができる。

コミュニケーションする相手が、常に同じ待遇関係の観点を取っていれば問題は生じない。文末表現に気を付ける「察し用法」は整然と行われる。しかし、待遇関係のどの側面に中心をおくかは、暗黙の了解のうちになされるのであり、相互の対人関係のバランス感覚による。（佐々木 1998）

この歌では「あなた＝男性 上位」「私＝女性 下位」であり、女性は男性よりバカで人から陰口を言われながらも、相手の男性だけを信じて「従っていく」というアンバランスな関係が示されている。このような「構図」は歌謡曲の中で繰り返し示され、男たちの口によってリフレインされ、やがてそれらは、「理想的な形の男性と女性の関係」としての学習されていく。それがまさに隠れたカリキュラムとして「歌の歌詞」が機能している所以なのだ。

しかし、「さそり座の女」という歌では、作詞をしたのは斎藤律子という女性であり、「女性が男性のために男性歌手が歌う女性の立場の歌」を作詞していることになる。

この歌詞は、男性は「遊びのつもり」だが、女性は「命がけ」で、そして女性が男性のあとをどこまでもついていく、という内容だ。これほど男性の望む構図をしかも女性の立場でなぜ男性に歌わせるのか。場合によってはむしろ男性が女性に対しても歌ってはどうかだろう。キャリアウーマンと草食系男子なら十分にありうる構図だと思うが、歌の歌詞としてはまだ支持されないかもしれない。

4. おわりに

諸イデオロギー装置は既存の社会構造をそのまま単純生産するための社会装置ではありえない。なぜなら資本主義的な社会・経済体制は固定された状況にはないからである。資本の自己増殖、技術革新と産業構造の変容、階級闘争やフェミニズム・レイシズムなどの社会運動、さらにその他種々の国際/国内要因の影響により、資本主義社会は常に激しい流動プロセスにある。（木村涼子 2003）

木村が指摘するように、2012年の日本は、大震災、原子炉の廃止といった激しい流動プロセスの中にあり、大震災では「家族の絆」が再認識された。そのような時代背景の中では、ここで例に出したような歌詞は、童謡が時代を超えて歌い継がれてきたようには、もはや本来の「イデオロギー装置」としての役目を果しえなくなっているかもしれない。むしろ大きな変革を迫られている現在、人々は既成の価値観とは異なる歌詞を求めている。それは、次々にシンガーソングライターが出ていくことにも現れているのではないだろうか。

参考文献

木村涼子（2003）『学校文化のジェンダー』勁草書房

佐々木瑞枝（1995）「カラオケの文化」『日本事情ハンドブック』大修館書店

佐々木瑞枝（1998）「日本語表現を通してみた察しの文化」『世界の中の日本型システム』新曜社

中村桃子（1995）『ことばとフェミニズム』勁草書房

（佐々木瑞枝 ささき みずえ 武蔵野大学大学院教授）

【第13回年次大会 シンポジウム:メディアの中でジェンダーはどんな姿を見せているのか 要旨】
子どもの本などにおける
ジェンダーとジェンダー解消の試み

谷口秀子

1. はじめに

『シンデレラ』などの西洋の伝統的なおとぎ話には、因襲的な女性像・男性像やステレオタイプの性的な性役割が見られることは周知のことである。たとえば、コレット・ダウリングは、『シンデレラ・コンプレックス』の中で、ヒロインがどのような苦境にあってもただ待っていれば素敵な王子様が助けに来てくれるという、因襲的なおとぎ話のパターンの幼児期の刷り込みが、成人後も女性を意識の根底で支配し続けており、女性に依存願望を植え付け自立と成功に対する恐れ of 感情をもたらししていると指摘し、幼児期に与えられる物語の影響力の大きさを訴えている。

また、現代の子ども向けの本や漫画やアニメなどのメディアにおいても、因襲的な女性像・男性像と固定化されステレオタイプ化された性役割が少なからず見られることも、議論の余地がないであろう。これらが、まだ十分な知識と批判能力を備えていない子どもたちに因襲的なジェンダーを刷り込み、ジェンダーを再生産する可能性も、少なくはないであろう。

一方、近年の子ども向けの本には、ジェンダーを排除しようという試みが見られるものも珍しくない。ロバータ・シーリング・トライツが『ねむり姫がめざめるとき』において主張しているように、将来の無限の可能性を持つ子どもたちに将来の多様な選択肢を提示することが子どもの本の使命のひとつであり、多様な女性像・男性像および男女の関係を提示し、自己像の選択肢の幅を広げることは、現代の子どもにとって、重要なことであろう。

本発表では、子どもの本などにおけるジェンダーに関して、ステレオタイプの女性像・男性像、固定的な性役割、テーマによる主人公の性別の選択などの例を論じるとともに、近年の子ども本などに見られるジェンダーを解消する試みの主な傾向について、具体的な例をあげて考察した。

2. 絵本に見られるステレオタイプ

近年の子ども向けの絵本においては、伝統的な西洋のおとぎ話に見られるような、行動する強い男性、男性の助けを待つ受け身のか弱い女性という固定的な性役割が露骨に示されている例は少ない。しかしながら、絵本に登場する女の子像・男の子像および男女の関係の描写においては、女性・男性に対する因襲的なステレオタイプが反映されている場合も少なくない。

たとえば、元気いっぱいの子どもの躍動感や力強さを描いた作品の主人公には、男の子が選ばれることが多く、探検や新しいものを見つける行為など主体的で積極的に行動する好奇心あふれた主人公としても、男の子が選ばれることが圧倒的に多い。また、たとえば、新しい土地に引っ越してきた幼い主人公の感じる不安は、女の子の主人公によって表され、さらに加えて、女の子が主人公の場合は、自分から外界に足を踏み出すのではなく、他者に働きかけられるのを待つ場合が少なくない。そして、男女の登場人物が描かれる場合、主導的な立場に立つのは主に男性であり、男性の方が女性を助け導く役割を果たすことが多い。

このように、男の子が主人公の作品を、女の子が主人公の作品と比べてみると、現実の個々の男の子や女の子の実態がどうであろうとも、作品のテーマの性質に応じて、主人公の性別が選択されていることがわかる。すなわち、因襲的に男性の属性と考えられているものには男の子を主人公に選び、女性の属性と考えられているものには、女の子を主人公にするというように、おと

ぎ話でもおなじみの、古くからの、女性像・男性像のステレオタイプが用いられている作品が多いことがわかる。(なお、本発表で扱った作品は、ジェンダーの現れ方の例として取り上げたものであり、筆者は各作品のすぐれた文学的価値を否定するものではない。)

3. 絵本におけるジェンダー排除の試み

近年の絵本における男女の描き方にも徐々に変化が訪れている。とりわけ、1997年の男女雇用機会均等法改正および1999年の男女共同参画社会基本法公布・施行以降の作品にその傾向が見られる。その時期に作成された作品に見られるジェンダーを排除する傾向の主なものは以下の通りである。

3.1 強い女性像

男性の助けを借りない、活動的で強い女の子の像は、たとえば、『ぶんぶんひめ』や『まゆとブカブカブー』に見られる。これらのヒロインは、怪物を恐れない勇気と超人的な身体能力を有する一種の闘うヒロインであるが、少女漫画の男装のヒロインとは異なり、男性の記号を借りずに強さや主体性を示しているのが特徴である。さらに、『まゆとブカブカブー』においては、やまんばの娘であるヒロインは、因襲的には男性の特質とされる勇気と強さと、女性的とされる思いやりと優しさとの両方を兼ね備えた、いわゆる両性具有的なヒロインとなっている。

3.2 女の子の好奇心

好奇心に溢れ、新しいものや外界に興味を示す積極性を持つ女の子の像も因襲的な女性像とは異なる女性像の選択肢である。たとえば、『サッチンのあかいくつ』のヒロインには、男の子の主人公に多く見られる積極性や好奇心・探求心に似たものが感じられる。サッチンは、いろいろな履物に好奇心を覚え、実際に履いてみたり、手を入れたり、耳に当てたり、両手で持って打ちならしてみたりする積極性を有する動的なヒロインであり、この作品では、男の子を主人公にした絵本によく見られるような好奇心やそれに伴ういたずらっぽさ、そして、躍動感が、女の子によって体现されているのである。

3.3 対等な関係

女の子と男の子の両方が描かれている場合、男性が主で女性が従というような、また、男性が主導権を握り女性は補佐役に回るといった男女の関係に対する社会的通念や固定観念が、作品に反映されることも少なくないが、その関係を転換させる作品も登場している。たとえば、『なっちゃんも ついてこーい』では、男性が主で女性が従というなっちゃんとけんたくんのステレオタイプの関係の転換の過程が描かれる。当初のステレオタイプの二人の関係は、けんたくんが恐怖に駆られてパニックになった時に、なっちゃんが、落ち着いた様子で、塀にひっかかっていたセーターをはずしてやる場面を契機に転換に向かい、圧倒的な優位に立ち、主導権を持ってなっちゃんを従えていたけんたくんの弱い面と、黙ってけんたくんに従っていたなっちゃんの冷静さが、並列的に提示され、男性は主で女性は従、男性は強くて女性は弱いというステレオタイプの図式に再考が加えられる。この場面以後、挿絵においてもふたりは並んで描かれるようになり、これまでとは異なる今後のふたりの対等な関係が暗示される。

3.4 並列的な描き方

加えて、男女を並列的に描く作品も登場している。『くうきやへようこそ』では、女の子のりん

こちゃんは、オス猫ぼんたと野原で遊んでいる途中、不思議な洞窟の入り口を見つけ、自分から、この暗くて深い洞窟に入っていくことを提案する。ふたりの間には、どちらが主でどちらが従という力関係も、積極性や好奇心や勇気や活発さの度合いの違いも、存在しない。さらに、りんこちゃんとぼんたが空にかっこいい形の雲を見た時に、「さんまのおとうさんみたい。かっこいいなあ」「ちがうよ、おかあさんみただよ。かっこいいなあ」「おとうさんだい」「おかあさんだい」と、ふたりに交互に語らせることにより、作者は、父親も母親も同様にどちらもかっこいい、というメッセージを読者に発信しており、ここにも、作者のジェンダー・ステレオタイプを排除しようという姿勢が表れている。

また、猫と話すことや「くうきや」での非現実的なエピソードにも関わらず、りんこちゃんの人物設定は、かなりリアリスティックであり、現実の活発な女の子の姿にかなり近い。このことは、因襲的な女性像を引きずった女の子が描かれることが多い中、元気な女の子像を提示するために、主人公を超人的な力を持つ特別な女の子として創造する作品と、『くうきやへようこそ』が異なる点であり、このような等身大の元気な女の子像は、女の子たちにとって、より良いロールモデルとなると言えよう。

4. おわりに

1999年に男女共同参画社会基本法が公布・施行され、男女共同参画社会を目指す動きが進んでいる中、日本の子どもの絵本における女性像・男性像そして男女の関係の描き方も、徐々に変化している。その変化の大きな特徴は、元気で主体性や行動力のある女の子の主人公が増えてきたことであろう。やまんばの娘や特殊な能力を持ったお姫さまのような、強い女の子が登場する作品が多数登場するのも、この時期前後以降のことである。一方で、女の子の強さは、上にあげたような、超人的な能力を持つ女の子の闘いを扱う作品ばかりではなく、普通の女の子が主人公である作品においても珍しくなくなっている。また、女性の登場人物の多様化に加えて、女性と男性との関わりを描く際にも、ジェンダーにとらわれない描き方をする作品が見られるようになり、男女が対等な立場で協調し助け合う様子を描く作品も、徐々に増えてきている。日本の絵本の中にも、子どもたちの自己像や将来の選択肢の幅を広げる試みが着実に進んでいるようである。

参考文献

- おりも きょうこ(2003)『くうきやへようこそ』福音館書店。
 こいで やすこ(2003)『なっちゃんも ついてこーい』福音館書店。
 さくらい ともか(2003)『サッチンのあかいくつ』福音館書店。
 ダウリング、コレット (1989)『シンデレラ・コンプレックス——自立にとまどう女の告白』(柳瀬尚樹(訳)) 三笠書房。
 谷口秀子(2003)「ジェンダーフリーと異形——絵本の中の女性像——」『言語文化論究』No.17、九州大学言語文化研究院、pp.29-43。
 富安陽子、降矢なな (2001)『まゆとブカブカブー——やまんばのむすめ まゆのおはなし——』福音館書店。
 トライツ、ロバータ・シーリンガー(2002)『ねむり姫がめざめるとき——フェミニズム理論で児童文学を読む』(吉田純子他(訳)) 阿吽社。
 沼野正子 (2001)『ぶんぶんひめ』福音館書店。
 (谷口秀子 たにぐち ひでこ 九州大学言語文化研究院教授)

【第 13 回年次大会 対談：メディアを通して見るジェンダーバイアス 発題要旨】

映画・ドラマ作品を通してみるジェンダーバイアス

因 京子

1. はじめに

本発題では、第二次大戦後日米で発表された映画やテレビドラマのいくつかを取り上げ、それらの作品の中で女性たちがどのように描かれているかを観察することによって、我々が無意識に受け取って内在化しているかもしれない、公平さを欠き真実とは異なるジェンダーに関する観念（ジェンダーバイアス）を明示的に意識するきっかけを提供したい。映画・ドラマは、その時代の社会状況や人々の考え方を反映していると同時に、人々が考え方を形成し社会が変化していく様相に影響を与え得る。「映画やドラマは無邪気な娯楽と夢を提供するだけのもので、そこから自分の生き方について影響を受ける人などないのでは？」と言う人もあるが、映画やドラマが何を「素敵なもの」として、何を「無様なもの」として描いているかが個人の観念や社会の通念の形成に与える影響は侮り難い。映画やドラマが女性についてのどのような認識を表現しているのかを意識することは、ジェンダーバイアスから我々を解放する一助となるであろう。本発表でとりあげるのは膨大な作品群のごく一部でしかないが、どれも、公開当時のみならず、数十年を経た今でも再上映（再放送）されるなど、一定以上の支持を集めているものである。

2. アメリカの作品

2-1 第二次世界大戦後のアメリカ作品

この年代の映画の女性描写の特徴をやや乱暴に一言で表せば、「シンデレラストーリーの賞揚」と言えるだろう。「素晴らしい男性に選ばれるという幸福」を手にする若くて美しい女性が描かれ、その素晴らしさを強調するために、しばしば、男性に選ばれず「オールドミス」になってしまった中年および中年にさしかかった女性に対比される。

例えば、『パリのアメリカ人』（1951年、ビンセント・ミネリ監督）では、主人公の画家と若い女性との恋が描かれる。若い女性と知り合う前、彼は、年長で裕福で芸術好きの女性から援助を申し出られ、まんざらでもなさそうであったが、若い女性と知り合うや否や年長の女性のことは忘れてしまったようだ。新しい恋人との恋は描かれるが、年長の女性との関係をどうしたのかは描かれない。中年女性が差し出すことができるのは金銭だけで、その魅力は若い女性の魅力とは比べ物にならないということが示唆されているようである。

『ピクニック』（1955年、ジョシュア・ローガン監督）では、レイバーデイを祝うピクニックに沸き返る町へやってきた一人の男性をめぐるストーリーが展開するが、若い女性と若さを失いかけた女性とが露骨に対比されている。若い女性は男性の視線を一身に集めているが、一方、教師の職に就いている、中年にさしかかろうとする年齢の女性は結婚を焦っており、新来者の男性に意のあるところを示すけれども相手にされず、さらにそのことで他の人々から嘲笑と非難を浴びてしまう。とはいえ、若い女性の「栄光」も束の間でしかないことが示されてもいる。若い女性の母親は娘に、「今は19歳でも、来年は20歳、次は21歳、その次は40歳よ！」と一日も早く結婚するように急き立てるのである。女性は男性に選ばれて結婚することが必須であるという強い信念の前には、教師として立派に自活しているという実績など何の意味もない。この信念は、男性だけでなく、女性である母親にも共有されている。しかし、この母親もそれほど幸福そうに

は見え、結婚していようがいまいが、女性が年齢を重ねることに明るさを感じさせる要素は乏しい。

オードリー・ヘップバーンの代表作の一つとして知られる『ティファニーで朝食を』(1961年、ブレイク・エドワーズ監督)でも、主人公と結ばれる作家志望の男性には物心両面で彼を支えてきた中年女性の恋人があった。今でもそのファッションが話題になる主人公は確かに美しいが、この中年女性も、素晴らしく美しく、優雅である。それでも、若い女性には全く太刀打ちできないものとして描かれている。

これらの作品には、「若さ・美しさの礼賛」、「結婚していない女性への嫌悪」が明瞭に示されている。戦争中には、徴兵された男性労働者の穴を埋めるべく、女性たちは工場での肉体労働にまで駆り出された。リベット打ちでも何でもできる逞しい腕を誇示する女性が好ましいものとしてポスターに描かれた(「Rosie the Riveter」)。このことを考えると、戦後のこの変化には驚くべきものがある。Benshoff and Griffin(2004)は、この間の事情を次のように解説する:「戦争中に Rosie the Riveter のような強いイメージを鼓舞され独立心を養った女性たちのもとに戻ってきたのは、今でいえば PTSD (Post-traumatic stress disorder, 心的外傷後ストレス障害) を患っている男性たちである。男性たちの傷を癒すために、この時代の映画は、男性性を『女性を manhandle する(手荒に扱う) 逞しさ』として再定義したのである。」男性優位の家父長制と資本主義信奉に貫かれていた映画界の送り出す作品の中では、戦争中に自活する知恵や力を備え男性にとって脅威となりそうな女性は敗れ去る者でなければならず、若く美しくいかなる問題を持っていようと男性を崇拜し頼りにする女性が勝者でなければならなかったのである。

2-2 女性解放運動以後のアメリカ作品

1960年代の公民権運動、70年代に盛り上がったウーマン・リブを経て、女性の生活そのものには相当の変化が生じたはずであるが、80年代以降になっても、シンデレラストーリーへの傾倒は相変わらず根強い。しかし、前の時代には敗者でしかなかった中年女性が主人公となる作品も現れている。

『ワーキング・ガール』(1988年、マイク・ニコルズ監督)は、実業界に働く現代女性が描かれる。仕事に恋に女同士の戦いが繰り広げられるが、若い主人公が中年の女性上司から仕事も恋人も奪ってしまう。登場する女性たちのファッションこそダークスーツに変わったが、「若い女性が勝者、中年女性はヒール(悪役、悪者)」という定型には変化がない。『危険な情事』(1987年、エイドリアン・ライン監督)では、妻子ある男性と一夜の情事を持った女性が彼に執着し、その家族にも付きまとうのだが、最後は妻の手によって暴力的な手段で彼女が打ち負かされ、一家の平和が回復される。シンデレラのその後とも言える家庭の主婦が善なる存在として、独身の有職女性が凶悪な存在として描かれているのである。発題者はこの映画が封切られた時、これを米国中西部の一都市の映画館で見たのだが、妻が夫の情事の相手をピストルで撃ったとき観客から拍手が湧き起こったことが忘れられない。確かに、陰惨な手段で子供にまで嫌がらせをする女性が打ち負かされたときには思わず「よくやった」と言いたくなかったのではあるが、この拍手には驚きと聊かの居心地の悪さを禁じ得なかった。「妻=善、独身女性=悪」という構図にやすやすと感情移入してしまいそうになった自身への苛立ちであったかもしれない。『プリティ・ウーマン』(1990年、ゲイリー・マーシャル監督)、『サブリーナ』(1995年、シドニー・ポラック監督によるリメイク作品)は、若い女性がその若さと美貌(だけ)によって望むものを手に入れていくシンデレラストーリーそのものである。

しかし、中年女性の感じ方を受容し安らぎを提供しようとするかのような作品も現れている。

『イーストウィックの魔女たち』(1987年、ジョージ・ミラー監督)では、彫刻家、音楽教師、ジャーナリストという専門職を持つ女性たちが主人公である。凡庸な男たちに飽き飽きしていた彼女たちの前に、一人の魅力ある男性が現れ、3人それぞれに言いよる。ところが彼は実は悪魔で、自分の子供を彼女たちに産ませるために現れたのであった。3人はいわば「恋敵」であるはずだが、男性をめぐる仲間割れするという展開には至らず、彼女たちはその知恵を働かせ協力して悪魔を葬り去るのである。『ファーストワイフ・クラブ』(1996年、ヒュー・ウィルソン監督)では、夫を若い女性に奪われた「元妻」たちが手を結んで不実な夫にしっぺ返しをする。前の時代の作品と違って、中年女性は「やられっぱなし」の惨めな存在ではなく、知恵も力も仲間も持つ頼もしい存在として登場する。『ため息つかせて』(1995年、フォレスト・ウィテカー監督)では、4人の女性の恋愛、結婚、離婚、仕事にまつわるトラブルや悩みが描かれ、女性たちが様々な鬱屈を抱えながらも女性同士の連帯の中に安らぎと夢を見出す姿が描かれている。ただ、それがパートナーの男性への幻滅感の裏返しのように見える点が、いささか苦さを感じさせる。社会に活躍の場を得て実力をつけた骨太の女性には、庇護者としての「王子様」がいないのは当然としても、パートナーもいないということなのであろうか。『マジソン郡の橋』(1995年、クリント・イーストウッド監督)は有夫の中年女性の恋愛を描いているが、この作品でも、恋の素晴らしさの裏には夫との生活への深い失望がある。

2-3 2000年代のアメリカ作品

2000年前後のアメリカで圧倒的な人気を博した作品に、『セックス・アンド・シティ』がある。テレビドラマとして1998年から2004年まで放映され、映画版は、2008年と2010年に作られた(マイケル・パトリック・キング監督)。それぞれに専門的職業をもってニューヨークで働く4人の女性を中心とした話で、仕事も自分の生活スタイルも大事だが恋もしたい4人がそれぞれパートナーを得るまで、また、得た後も続く紆余曲折が、赤裸々な女同士の会話を交えて描かれる。

この作品の中には社会や認識の変化を反映していると考えられる点が数多く見られる。まず、女性主人公たちは、美しいが30代以上で、「初心な若い女の子」ではない。恋の経験も数々あり、男性を品定めする。この作品の中心的要素は、この4人の女性による会話、それも、性的話題を含む女性同士の会話である。そのほかにも、登場人物の人種、宗教、性的嗜好などが多様で、必ずしもWASP(White Anglo-Saxon Protestant)が理想的人物として描かれないこと、子供を持ち家族を作るという選択が恋愛関係の当然の帰結として想定されていないこと、女性の社会的地位が男性のそれより高いカップルが登場することなど、様々に現代社会と人々の認識の変化を反映する特徴を備えている。もちろん観客に娯楽を提供する「夢物語」である以上、現実の女性の生活や感情を等身大に反映しているわけではないが、男性に選ばれること以外の欲望を持ち、悩みや不安や利己的な気持ちを抱えている女性が「素敵な女性」として提示されるようになったことは、1950年代とは大きく異なる。

3. 日本の作品

3-1 高度経済成長期以前の作品

1960年代前半までの、高度経済成長時代を迎える前の日本では、男性も女性も高等教育を受ける機会は限られおり、職業選択の幅にも大きな制約があった。その制約が女性にとってより大きかったことは言うまでもない。しかし、60年代前半の日本映画には、制約の中で生きる女性の逞しさを肯定的に描いた作品が複数見られる。『夜の流れ』(1960年、川島雄三・成瀬巳喜男監督)は、料亭を営む母とその娘、その料亭の料理人で実は母の愛人でもある男性を中心に話が展開す

る。娘は母と男性との関係を知らずこの男性を好きになってしまい、彼は遠くへ去る。その後、恋に殉じて全てを放擲しこの男性を追いかけていくのは、娘ではなく母である。娘は、当時としては珍しいことに大学を卒業しているのであるが、有利な縁談を断って自活の道を選ぶ。その道が母と同じ花柳界であるところには時代の限界が感じられるが、中年の母も若い娘も、それぞれの判断で自分の道を選択していく姿が描かれている点は、「人形のように可愛い女性が男性に選ばれる」姿を描いている同時代のアメリカ映画や、高度成長期のヒット作などとは、一線を画している。『小早川家の秋』（1961年、小津安二郎監督）は、京都伏見の造り酒屋を舞台に、主人である老人、その亡くなった長男の妻、養子を迎えて家業を継いでいる長女、未婚の次女、主人の昔の情婦とその娘などが登場し、長男の嫁への再婚話、次女への縁談、主人の死が描かれる。上品に描かれている女性もいささか野卑に描かれている女性も、それぞれの状況の中で生き抜こうとしている存在として提示されている。また、「嫁と小姑」との交情が、何かへの復讐心や諦めを前提としているのではなく、自分の道を選びとろうとしている者同士に生まれる清々しい共感に基づく連帯として描かれている。『鬼婆』（1964年、新藤兼人監督）は、仏教説話をもとに嫁と姑（若い女性と中年女性）との争いを描いた作品で現代劇ではないが、今泉（1997）は「二人の女の戦いがエロスの要素で勝る若い女の勝利に終わるという単純な筋道を辿らない」という点を評価している。高度経済成長期以前の日本映画において、中年・老年の女性が知恵と経験を備えた侮れない存在として、また、エロスにおいても若い女性と互角に渡り合う存在として描かれており、若い女性も「若さ・美しさ」だけでなく、自分の信念に殉ずる強さを備えた人物として描かれている点は、注目に値する。

3-2 高度経済成長期の作品

高度経済成長期にヒットした作品の中では、理想の若い女性は「最高の男性に選ばれるシンデレラ」である。1961年から71年にかけて実に17本もの作品が作られた加山雄三主演『若大将シリーズ』（東宝）は、老舗料理店の息子でスポーツ万能の「若大将」と呼ばれる大学生が主人公である。若大将は、同じ大学に学ぶ女子学生をはじめ多くの女性に愛されるが、その心を射止めるのは常に「澄子さん」である。彼女は、客室乗務員、宝飾店店員、自動車修理工、旅行添乗員など、様々な職業を持つ女性として登場するのだが、女子大生であることはない。圧倒的に美しいが、ささいなことで拗ねたり、若大将の友人の「青大将」を都合よく利用したり、若大将のもとに駆けつけるために仕事を放り出したり、その行動はどう考えても褒められたものではないが、若大将がそれを問題視することはない。興味深いことに、この作品には、若大将の「祖母」「妹」「父」は登場するが、「母」は既に亡くなったという設定になっていて、登場しない。「選ばれる美しいシンデレラ」の欠点を見抜くだけの知恵と経験、恐らくはまだ美しさも十分残している中年女性は、はじめから注意深く排除されているのである。

では、中年女性はどこにいたのであろうか。中年女性は「家を守る女」という形で居場所を与えられている。家業を担う屋台骨として女性が奮闘するという内容を持つ作品が高度成長期には複数作られているが、その代表格とも言えるのはテレビドラマ『肝っ玉母さん』（1968-72年、平岩弓枝・石井ふく子）であろう。夫を失い、家業の蕎麦屋の経営者となった中年女性が、長男とその妻、娘、妻の実家の人々、従業員など、周りのすべての人に頼りにされつつ、元気に働いて蕎麦屋の暖簾を守っている。家族や近所の人々の間に起こるもめ事や心配事を解決に導く「母さん」は、悪人の誰一人登場しないドラマの中でも格別の善人で、経営者として、人間関係の要として、彼女をとりまく世界に君臨している。しかし、「母さん」自身にはエロスの要素は一切ない。『細腕繁盛記』（1970-74年、花登筐）は、嫁いできた女性が家業の旅館を窮地から救い発展

させる物語で、彼女を巡る恋愛の要素も描かれるが、主人公は家業の発展のため自分の恋を成就させることを断念する。人気ホームドラマ『時間ですよ』(1970-89年、松田暢子他)でも、「おかみさん」である中年女性が皆に頼りにされる中心人物としての役割を与えられていたが、もちろん、エロスの要素はない。このように、高度成長期のドラマでは、中年女性が、主人公として、あるいは重要人物として、大きな位置を占めている。とはいえ、エロスの要素を持たない「母さん」「おかみさん」が職業人として活躍する舞台はあくまでも「家業」、すなわち、家庭の延長上にある自営業の範囲であり、彼女が取り仕切っている集団は、隣人たちを含む拡大家族ともいうべき集団であった。

高度経済成長期を支えた類型的な「幸せ神話」の中で、女性は、「素晴らしい男性に選ばれるシンデレラ」となることが最高であり、もはやシンデレラではいられない年齢の女性には、「家庭の幸福の番人」という立場が与えられたと言えよう。この中年女性の立場に様々な制限があったことは確かであるが、この時期にも、中年以降の女性が中心人物と位置づけられていたことは、日本の映像メディアにおける女性描写の一つの特徴と言えるのではないだろうか。

3-3 高度経済成長期後の作品

高度経済成長期も終わりに近づき、「バブル期」へと向かおうとしていたころから、家庭を舞台とするドラマも、ほのぼのとした人間模様を描くというよりは、家族や近所づきあいの日常の中にある対立や諍いや不満を描くようになっていった。いわゆる「辛口ドラマ」と言われるものである。また、「家族の幸せだけを願う母」でなく、自分のエロスの要求を追及する中年女性が登場するようになる。『岸部のアルバム』(1977年、山田太一)は、何一つ不自由のない家庭の貞淑で幸福な妻と見える中年女性が若い男性を恋人に持つというストーリーで注目を集めた。『阿修羅のごとく』(1979年、向田邦子)でも、夫を亡くし妻子ある男性と恋愛関係にある中年女性が登場する。

若い女性の描かれ方にも、新たな傾向が出てきた。恋愛が重要要素であることは変わらないが、職業人としての側面がそれ以上に大きく扱われるようになった。新しい要素を含んでいたと思われる作品として『悪女』(1992年、深見じゅん原作)を挙げたい。これは、同名の連載漫画を原作にした作品で、主人公は、落ちこぼれ女子大生であったが運よく一流企業に採用され、失敗を重ねながらも頭角を現していく。「ダメな子」が「エリート」に勝っていくというのは典型的に漫画的なストーリーではあるものの、着目すべきは、主人公が「企業の中で出世して見せます」と社会的野心を露わにすることである。普通の女性が一般的組織での成功を欲すること、しかもそれを明言することを肯定的に描くという点は、従来の描写とは少しく異なる。ほかにも、女性が料理人を目指して努力する『おいしい関係』(1997年、槇村さとる原作)、女性があらゆる窮地を救う「超人」として登場する『ハケンの品格』(2007年、中園ミホ脚本)など、職業人としての女性を描くドラマが多く作られている。これらの作品の描写には体制側にとって都合のよいイメージが差し出されていると言える点があり、また、「結婚」をゴールとする徒競走のような恋愛を描く作品も相変わらず作られているが、「男性に選ばれること」が若い女性にとっての理想でありゴールであるという前提が弱まり、社会の中での一職業人としての女性が多く描かれるようになってきたことは確かである。女性が努力して職業上の成功を手にする物語はこれまでもあったが、それらの多くは、前節で述べたように婚姻(および、夫の死去か無能)によって女性に差し出された家業、あるいは、「バレリーナ」「女優」など特殊な才能が人を選ぶ分野を舞台としており、平均的女性が自分の意志で選び取った仕事とは言えなかった。

4. メディア分析から見えてくるもの

非常に大雑把に日米の映像メディアに現れた女性像を概観してきたが、さらに大雑把にその傾向を纏めるならば、アメリカは、女性を性的な存在としてとらえる傾向が支配的であったのに対し、日本では、その母性に焦点をあてる度合いが高かったと言えるのではないだろうか。高度成長期に現れた、エロスの要素は封印されているが安定と権威を得ている中年女性の像は、母性を基盤に確固たる地位を占めている女性像の典型であろう。

家庭という王国の権力者という太母的中年女性の像は、日本女性の位置を理解する上で重要な鍵となるように思われる。日本のジェンダー間の平等の度合いは、世界経済フォーラム（World Economic Forum）のまとめたジェンダー格差指数（Global Gender Gap Index）によると 2012 年には世界 135 か国中 101 位で、この数値から見る限り、日本女性の地位は男性に比べて著しく低い。興味深いことに、「教育程度」「健康・生存」の面ではほぼ完全に近い平等が達成されていて社会進出のための基礎能力は得られているはずであるにも関わらず、「経済的参加」の度合いが低く、「政治参加」に至ってはほぼ完全不平等とも言える数値で、世界でも最低ランクなのである。アメリカ映画によく現れる、日本人女性にとっては違和感を抱かずにはいられない弱々しい日本人女性の像、たとえば、『ガン・ホー』（1986 年、ロン・ハワード監督）の中の経営者の妻が夫に隷属しているように描かれるのも、こうした数値から見れば無理もないかもしれないと思わせられる。しかし、それにも拘わらず、70 年代以降アメリカで高まりを見せたウーマン・リブ運動も日本では大きな勢力を得るには至らず、一部の人々の真摯な努力にも関わらず夫婦別姓も一般化せず、いまだに結婚によって多くの女性が夫の姓に改姓する。不思議とも思われるこのような状況を生み出している一要素として、家庭経済のやりくりをほぼ全面的に任されていた妻が少なくなかったという事実が指摘できるだろう。もちろん、日本人の妻のすべてが家の財布を握っていたわけではなく、支配権が及ぶのは家庭とその周辺だけという制限はあったものの、経済的裁量権を手にした女性は、豊かなアメリカの家庭の専業主婦でも自分自身の収入を持たない場合にはなかなか得られなかった自由を味わっていた。発題者は、高度経済成長期に子育て期を過ごした専業主婦である日本女性が「夫のお金は親のお金より使いやすいよね、安月給が玉に瑕だけど」と述べ、その友人の数名が笑いながら大いに同意して頷く場面に居合せたことがある。結婚に伴う改姓も、夫の家の正式な一員としての地位が与えられ、夫の死などに際しては妻が家業の経営権を得ることができる立場を保障するという面があった。もちろん、一般家庭の妻の地位は「おかみさん」という経営者の地位とは異なるが、規模は小さいものの「おかみさん」にも通じる裁量権があったことは、自信と安定につながっていたのであろう。女権拡張運動の盛り上がりがない日本における女性のこうした特権的な一面を指摘する著作（Ho, 1988 年など）が現れる前から、統計からは見えにくい女性の実情、また、女性たちがどのようにその特権的立場に倦んでいくかを、映画やドラマはいち早く明らかにしていたと言える。

5. おわりに

アメリカにおいても、日本においても、映画やテレビドラマにおける女性像はこの半世紀、大きな変貌を遂げてきた。その変貌を推し進める最大の要素は社会そのものの変化であるが、それを支えるのは我々の認識であるが、一方、メディアが描き出す像は我々の認識に大きな影響を与え得る。観客としての我々が、娯楽を享受しつつも、メディアが描き出す姿を分析的に眺めていくことが、自分の、そして社会の認識をより大きな自由へとつながるものにしていくことに貢献し得るであろう。

参考文献

今泉容子 (1977) 『日本シネマの女たち』 ちくま書房

日下翠 (2000) 『漫画学のススメ』 白帝社

因京子(1998)「映像メディアに見る女性」『放送芸術学』 No.14, 73-82

Benshoff, H.M. & Sean Griffin(2004) *America on Film: Representing Race, Class, Gender, and Sexuality at the Movies*, Blackwell.

Ho,Lucy(1988) 『女性天国ニッポン』、マクミランランゲージハウス

Sigonrielli,N.(1987) Television and conceptions about sex-roles: Maintaining conventionality and the status quo. Paper presented at the annual conference of the International Communication Association.

_____ (1990) Children, Television and Gender Roles: Messages and Impact, *J of Adolescents Health Care*, 11, 50-58

世界経済フォーラム ジェンダー格差指数 (Global Gender Gap Index by World Economic Forum)

<http://www.weforum.org/reports/global-gender-gap-report-2012>

(因京子 ちなみきょうこ 日本赤十字九州国際看護大学教授)

【第 13 回年次大会 対談：メディアを通して見るジェンダーバイアス 発題要旨】

Gender Bias in Media—Hope We Can Do Something About It

Reynolds Akiba Katsue

ホノルル・メディア・タスク・フォースは、何をしてきたか？

(スポーツカード等)

ジーナ・デイヴィスという女優 As an example of what we can do.

映画『テルマとルイーズ』(1991 年公開) の終幕は何を意味するのか

TV シリーズ「マダム・プレジデント」(2005 年放映開始)——Hillary Clinton,

Nancy Pelosi

Interactive media の可能性—雑誌 Ms. の今 (Blog, face book, twitter).

In the 80's and the 90's, the Honolulu Media Task Force was the most active; all the members gathering in a 6th floor room of the State building to discuss various cases of gender bias: many newspaper articles containing words and phrases of discrimination were brought to the table; the TV anchors' casual comments putting down women were reported, magazines and public documents with pictures suggesting discriminatory images of women were recorded; the progress of the project of rewriting "Roberts' Rules" was reported; The plan of making posters and booklets for gender fair expressions available to all state workers was proposed;

When I came back from Japan after finishing my work at Konan Daigaku, Kobe, I listened to the board of education meeting broadcast on TV. To my happy surprise, no one used "chairman." Everyone said "chair" or "chairperson." We have done it! Yes, as Anita Taylor said in her farewell Editorial of *Women and Language*, "much has changed" while much has to be changed. The efforts towards a gender fair Media is in progress, being taken over by many individuals who intend to continue the history of women in the 80's and 90's.

In order to see the on-going changes, I take one person as an example. Geena Davis an actress-activist. We tend to think that movies and TV programs contaminate people's minds by releasing gender bias messages, but Geena Davis teaches us to use them to change gender bias. Does anyone remember "Thelma and Louise" 映画『テルマとルイーズ』(1991 年公開), a movie released in 1991? It showed the frustration of ordinary women in a discriminatory society, America. Thelma and Louise, who were chased by the police to the end of a highway, stepped on the gas and flew in the air over the edge of a cliff. What happened to them? What is the message of the ending?

What about TV drama series "Commander in Chief" (TV シリーズ「マダム・プレジデント」(2005 年放映開始)? It was a fictional administration and family of Mackenzie Allen (portrayed by Geena Davis), the first female President of the United States. The series began broadcasting on ABC on Tuesday, September 27, 2005, at 9 p.m. Eastern Time. The show was #1 on Tuesday night ratings.

Why were Americans so enthusiastic about this program? It is because the appearance of a female president is no longer far off dream. For example, Hillary Clinton, who could have become the first woman president, was appointed Secretary of State, one of the highest positions in the president's cabinet, and she is now talked about as a possible "Madam Commander in Chief" after Obama's term is over in 2016. Also, Nancy Pelosi was the first speaker of the House of Representatives (60th speaker) in US political history. She

has not changed her feminine style: She is always smiling like a mother or grandmother and does important things in a congenial way. Media is showing images of women, which were unthinkable 20 years ago.

Geena Davis is also the co-founder of the Woodhull Institute, a non-profit organization that provides professional development and leadership training for women. Similar things, making women visible in socially effective positions and supporting younger women becoming assertive and independent as full-fledged human beings, are happening in many other places.

Women are becoming increasingly visible in the fields that used to be for MALES ONLY. Margot Magowan has investigated, “Who writes more articles with their signatures in the papers and magazines, men or women? The result was reported in the *Ms. Blog: The New York Review of Books*—462 males to 79 females, *The New Republic*—256 males to 49 females, *The New Yorker* ‘book review’ section—36 males to 9 females, etc. The finding can be looked at negatively or positively. The print media no longer excludes women. Changing the media is not easy, but it is not impossible.

Reference

れいのるず=秋葉かつえ 1995. 「アメリカにおける言語変革の実践——メディア・タスク・フォースの場合」『ず・ぼん』2号. (Available at <Reynolds UH ScholarSpace>)

Margot Magowan. 2011. Why There’s Gender Bias in Media—and What We Can Do About It. *Ms. Blog*, Feb 10.

(ReynoldsAkiba Katsue レイノルズ秋葉かつえ ハワイ大学教授)

【第 13 回年次大会 研究発表要旨】

メディア・リテラシーとジェンダー
ーメディアのマルチモダリティ分析を通じた意味構築ー

岡本 能里子

1. はじめに

現在社会において、多様なメディアを通し、言語のみならず、音声、映像等の複合的な要素によって情報や意味が伝達される。近年では、テクノロジーの発達によって、動画、映像に代表されるビジュアル要素が台頭し、その優位性が認められる。メディア・リテラシー研究は、早くからこの点に注目してきた。即ちテレビでは、音声や画像、新聞においては、レイアウトや紙面の面積などの複合的な要素に注目し、それらの相互作用を通して意味が創出され、メディアが現実を「構成」し、そこにイデオロギーが埋め込まれることを明らかにした。

このような研究の成果は、メディア研究先進国であるイギリス、カナダ、オーストラリアなどでは、既に国語教育、英語教育に取り入れられ、言語がこれらの要素の1つでしかないことを、実践を通して教えている。

一方日本では、言語教育において、文法能力かコミュニケーション能力かという焦点の違いはあったが、基本的には、言語表現能力に焦点が置かれ、非言語要素は副次的なものとされていたといえる。

そこで、本研究では、The New London Group という英語教育研究者集団が提唱している、‘Multiliteracies’という概念をもとにして、新聞のスポーツ記事を中心に、分析し、いかにジェンダーイデオロギーが埋め込まれ発信されているかを考え、日本語ジェンダー研究への新たな視点を見出したい。

2. メディア・リテラシーとジェンダー研究

2-1 メディア・リテラシーの定義とメディア・リテラシーの8原則

まず、メディア・リテラシーの定義を確認しておきたい。これまでいくつかの定義があげられているが、以下の定義が、コミュニケーションをつくり出すという能動的な視点を射程に入れている点で、本研究での定義としたい。

「メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアに

アクセスし、多様な形態でコミュニケーションをつくりだす力をさす。また、そのような力の獲得をめ

ざす取り組み」（鈴木 1997 p.18 、2001 p.4 下線筆者）。

その具体的な視座としてカナダ・オンタリオ州教育省が提示しているメディア・リテラシーの8原則は以下のとおりである。

メディア・リテラシーの8原則

1. メディアはすべて構成されたものである。

2. メディア表現は現実を構成する。
 3. オーディエンスは、(メディア表現から) 独自の意味を読み取る。
 4. メディアは商業的意味をもつ。
 5. メディアはものの考え方(イデオロギー)と価値観を伝えている。
 6. メディアは社会的・政治的影響力をもつ。
 7. メディアの様式と内容は密接に関連している。
 8. メディアはそれぞれ独自の美的=感覚的形式 *aesthetic form* をもっている
- カナダ・オンタリオ州教育省 (1992)

これらの定義と原則に加え、筆者は、OECD DeSeCo プロジェクトにより国際社会に共通となる能力として選択されている以下の「キー・コンピテンシー」を教育実践の基礎として位置づけている。

「言語を含めた多様な道具を媒介として、対象に働きかけ、主体的に判断し、多様な他者との協働を通して社会を創っていくという能力」 (ライチエン,D.S&サルガニ 2006, 岡本 2007, 2010)

2-2 リテラシーからマルチリテラシーズへ

The New London Group の提唱するマルチリテラシーズ(複数のリテラシーズ)とは、規範となる「正しい」「一つの」英語という言語観を認めないことと、言語のみならず意味を伝える複数のモードに着目することである。意味を創り出す複数のモードとして「言語」「視覚」「聴覚」「身体」「空間」をあげており、それらを統合した「多相的なデザイン」を通して意味が構築されるとする。

2-3 メディア・リテラシーとジェンダー研究の相性の良さ

なぜジェンダー研究に必要な視点としてメディア・リテラシーを取り上げるのかについては、正に相性が良いからである。先の8原則の中で特に最も重要とされる原則1は当然のこと、2、5、6に示されているとおり、ジェンダーもメディアも社会文化的に「構成され」ており、それが「現実を構成し」、「ものの考え方(イデオロギー)と価値観を伝え」、「社会的・政治的影響力をもつ」のである。

よって、メディアに埋め込まれ、創り出されるイデオロギーに注目し、クリティカルに分析、考察することは、クリティカルリテラシー育成に貢献するといえるからである。

2-4 背景としてのメディア環境

研究の背景となる現在のメディア環境の特徴として、テレビが生まれてから、最近のインターネットに代表される、多様なメディア出現に至って、文字、音声、動画といった言語のみならず、視覚、聴覚など多様な感覚を総動員させる複数モード(マルチモーダル)のコミュニケーションが日々行なわれていることが指摘できる。その中で特に今回は、視覚的な要素(ビジュアルモード)としての写真に加え、文字のレイアウトをビジュアルモードとして捉え、見出しのことばの意味、写真との相互作用を通してどのようなメッセージが伝えられたのかに注目した。

2-5 ジェンダー研究とマルチリテラシー研究の接点としてのスポーツ記事

今回はデータとしてスポーツ記事を取り上げた理由は以下である。

1. スポーツは「男らしさ」「女らしさ」「ナショナリズム」などのイデオロギーが埋め込まれやすい。
2. メディアにおける写真、図、表、イラストなどの複数モードによる意味伝達が行なわれている。
3. 「見出し」は、限られたスペースに意味を込め、レイアウトやフォント等で、躍動感や興奮を伝える。
4. テレビとは異なり、言語による意味伝達が中心であると見られがちな新聞の中で、上記2、3の特徴から、意味伝達の言語偏重の問題点に気づきやすい。

以上から、新たな「日本語とジェンダー」研究の可能性を提示できると考える。

3. 分析と考察

3-1 リサーチクエッションと分析手法

以下のリサーチクエッションを設定し、上記メディア・リテラシーの観点から、複数の伝達モードの相互作用を通して伝えられる意味を分析し、考察した。

1. どのように紙面がデザインされているか
2. どんなジェンダーバイアスが埋め込まれているか
3. どんな価値が伝えられたのか

3-2 データ

今回のデータは以下のとおりである。

1. 女子フィギュアスケート バンクーバー五輪 浅田真央 キム・ヨナの記事
朝日新聞埼玉版
2010年 2月25日～2月26日
韓国版 ネットニュース
2. 高校野球 朝日新聞埼玉版
2005年 8月7日～8月18日
2009年 8月8日～8月20日

4. 結論

上記のリサーチクエッションをもとに、新聞記事を分析した。その結果の概要をまとめる。

4-1 女子フィギュアスケート

1. どのように紙面がデザインされているか

写真の位置：浅田が左、キムが右、浅田が後ろ、キムが前に配置されている。

写真の表情：浅田が不安そうな表情である一方、キムが自信あり気な表情となっている。

記事内容：2人が同じ14才であることや、「ライバル」という表現で説明されている。

それによって、以下の意味が伝えられていることを示した。

- ① ビジュアル・グラマーの観点から、上記左右の配置は、過去＝浅田 未来＝金 という図式になる。
- ② 精神的に弱い浅田と精神的に強いキムという対照的なイメージを創り出す。
- ③ それによって、浅田を応援しないと負けてしまうのではという不安を与え、「国民」みなで弱い女性を応援しようというメッセージを伝えることとなる。

2. どんなジェンダーバイヤスが埋め込まれているか

強さではなく、弱さに女性性を見出し、男性やみなから支えられてはじめて勝てるという浅田のイメージを構成しているのではないか。

更に注目したい点は、韓国版ネットニュースにおいては、2人の位置関係や表情が全く逆になっていたことだ。韓国では、キム・ヨナは、日本で伝えられるような「強いイメージ」ではなく、「国民の妹」と言われ、かわいく頼りないイメージがあるようだ。上記日本と韓国の対照的な記事からも、強さが求められるスポーツという場面においても、弱さという女性性が女性アスリートに付与され、女性というジェンダーが再構築されていく過程が垣間見えるのではないだろうか。

4-2 高校野球

1. どのように紙面がデザインされているか

写真：負けた方の選手にフォーカス

写真の説明：「.....が.....できず」という定型文が見られる。

例「松商学園の打球に沖縄尚学の比賀が飛びつくが届かず」

上記はボールに飛びつこうとしたが取れなかった写真に付された説明である。ベースに滑り込んだが、アウトになったなど、懸命に戦っている写真が多い。

見出し：「悔いなし」「燃焼の...」「さわやか」「夢...」という語彙がちりばめられる

2. どんなジェンダーバイヤスが埋め込まれているか

上記の写真と説明、見出しなど、多相的な意味表現体から以下のような点が見出せるのではないか。

① 日本のあるべき青年像の再構築

負けた方への同情、共感

チャレンジした2番目の立場を称賛

努力、ひたむきさ、あきらめない

たとえ適わなくても夢を追うことに価値

②「高校野球物語」の協働の再構築

球児のアイデンティティー：

① のような姿をもった日本の理想の青年像＝日本のあるべき青年アイデンティティー

5. 今後に向けて：日本語ジェンダー研究への示唆

新聞のマルチモダリティ分析により、社会実践としてのディスコースを捉えることによって、受信者としても発信者としても、メディアディスコースにおけるジェンダー研究に対して、以下のような示唆が得られると考える。

1. 多相化する意味表現体による意味構築への気づき

2. メディアに埋め込まれた権力やジェンダーイデオロギーへの気づき

3. 自己のジェンダーバイヤスへの気づきと、「常識」の見直し

日本では、まだ言語教育現場におけるメディア・リテラシーの取り組みでさえ、始まったばかりである。言語教育は、ことばの意味を理解するだけでなく、他者を理解すると同時にことばを使って自己を表現し、社会を構築していく主体を育成することにある。日本語は男女の位相差が大きく、言語におけるジェンダー研究の歴史は長い。しかし、このような益々多相化するメディ

アの意味表現体にうめこまれたイデオロギーとしての「男らしさ」「女らしさ」についての研究は、まだ少ない。

メディアが創り、再生産するイデオロギーとしての「男らしさ」「女らしさ」「青年らしさ」などの価値観や「常識」をどのように脱構築するか。メディアをクリティカルに読み解き、コミュニケーションをつくり出し、新たな価値を構築し、ジェンダーイデオロギーを脱構築していく能力の育成が急務である。そのための地道な研究は、ジェンダー研究が正に担うに値するテーマであろう。

参考文献

- Cope, B. & Kalantzis, M. 2000: *Multiliteracies—Literacy Learning and the Design of Social Futures*, Routledge
- Fairclough, Norma. 1989. *Language and Power*. Longman
- 伊藤 守編 2006 『テレビニュースの社会学-マルチモダリティ分析の実践-』 世界思想社
- 門倉正美 2011 「コミュニケーションをく見る」-言語教育におけるビューイングと視読解』『早稲田日本語教育学』第 8,9 号、115-120
- 門倉正美・岡本能里子・奥泉香 2008 「ビューイング教育を日本語教育に導入する試み」 日本語教育国際研究大会予稿集. pp. 288-291、
- カナダ・オンタリオ州教育省編/FCT (市民のテレビの会) 訳 1992 『メディア・リテラシー-マスメディアを読み解く-』 リベルタ出版
- Kress, Gunther 2003 *Literacy in the New Media Age*, Routledge
- Kress, G. & van Leeuwen, T. 1996 *Reading Images—The Grammar of Visual Design*, Routledge
- 水越伸 2002 『新版・デジタル・メディア社会』 岩波書店
- 奥泉香 2006 「「見ること」の学習を、言語教育に組み込む可能性の検討」『リテラシーズ』第 2 号 37-50 くろしお出版
- 岡本能里子 2007 「未来を切り拓く社会実践としての日本語教育の可能性-メディア・リテラシー育成を通した学びの実践共同体をデザインする」 小川貴士編著『日本語教育のフロンティア—学習者主体と協働—』 79-110. くろしお出版
- 岡本能里子 2008 「日本語のビジュアル・グラマーを読み解く—新聞のスポーツ紙面のレイアウト分析を通して—」 岡本能里子・佐藤彰・竹野谷みゆき編『メディアとことば 3』 26-55 ひつじ書房
- Okamoto, N., K. Okuizumi, S. Sato, Y. Kumagai & M. Masami 2009 'Multimodal literacy in Japanese: Theory, Practice, and Application to Language Education' Conference Proceeding, the 11th International Pragmatics Conference, Melbourne, Australia
- 佐藤慎司・熊谷由理編 2011 『社会参加を目指す日本語教育-社会に関わる、つながる、働きかける—』 ひつじ書房
- 鈴木みどり編 1997 『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』 世界思想社
- 鈴木みどり編 2003 「Study Guide メディア・リテラシー ジェンダー編」 リベルタ出版
- The New London Group 2000 in Cope, Bill & Kalantzis, Marry (eds.) *Multiliteracies—Literacy Learning and the Design of Social Futures*, pp.9-37. Routledge.

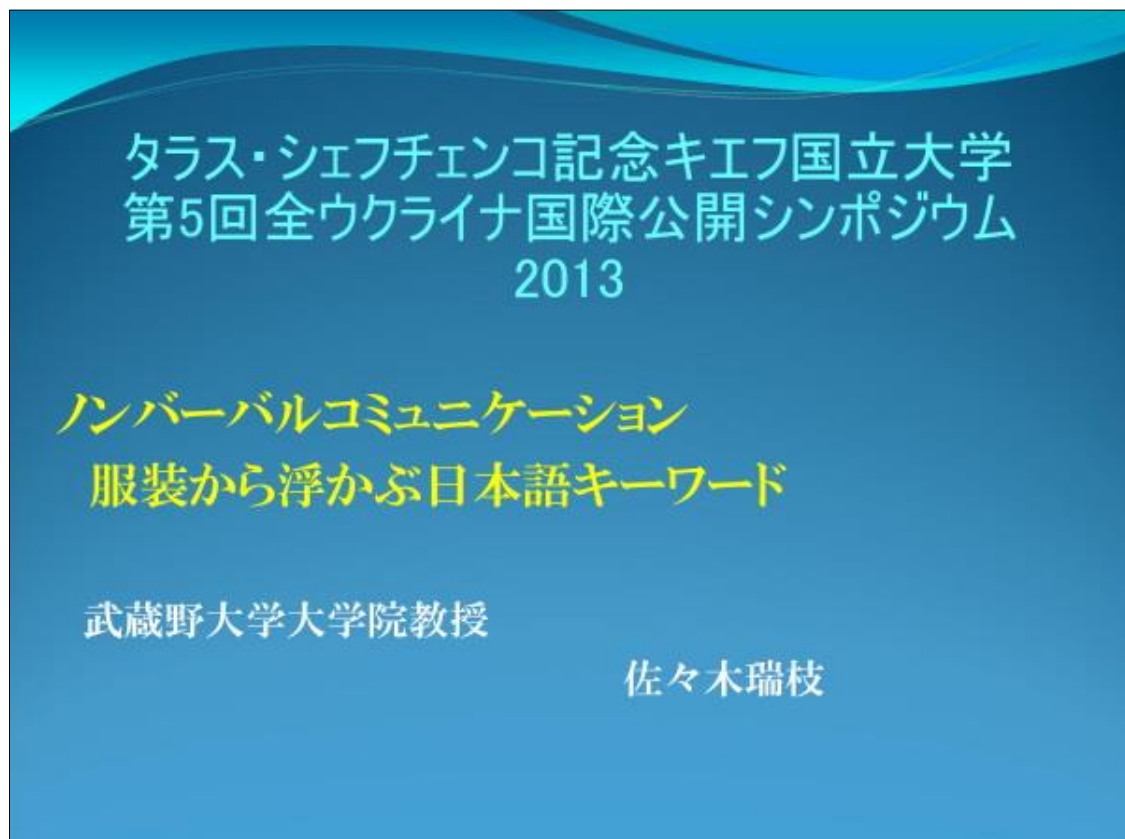
ライチエン, D. S & サルガニ, L. H 編著 立田慶裕監訳 2006 『キー・コンピテンシー：国際標準の
学力を目指して』 明石書店

(岡本能里子 おかもと のりこ 東京国際大学教授)

【国際大会 2013 in ウクライナ 講演要旨】

ノンバーバルコミュニケーション服装から浮かぶ日本語キーワード

佐々木 瑞枝



言葉によるメッセージは 35パーセント

- 「二者の対話では、ことばによって伝えられるメッセージ（コミュニケーションの内容）は、全体の35パーセントにすぎず、残りの65パーセントは、話ぶり、動作、ジェスチャー、相手との間のとり方など、ことば以外の手段によって伝えられる」（レイ・L・バードウィステル）



言葉以上のことば

- あらゆる文化形態で、すべての年代の人々が、ジェスチャー、目の使い方、身体接触、沈黙、空間、時間、色彩などを駆使してメッセージを送り出しています。それにもかかわらず、どのような人間社会においても
- 「ことばならざることば」が、ことば以上に強力に意思や感情を伝達しているのです。



ノンバーバルコミュニケーションの10要素

- 1. 挨拶
 - 2. 相手を無視する態度
 - 3. 相槌を打つか、打たないか
 - 4. 身体的な伝達行動
 - 5. 身体的特徴
 - 6. 接触行動
 - 7. 周辺言語
 - 8. 空間要
 - 9. 物品要素（
 - 10. 環境要素
- （佐々木 2012）



日本人はなぜ服装を大事にするのだろうか？

- 「場に合った服装」をすること、あるいは「しないこと」は「無言のコミュニケーション」を主張している。
- 高コンテクスト文化(high context culture)生活習慣や文化的背景、経験に共通する部分が多い文化のこと。高コンテクスト文化では、敢えて明確な表現を避け、与えられた状況の中から物事の真意を「察する」、そして相手も「察してくれる」ことが好ましいとされる。
- 「場に合った服装」が要求される日本社会は高コンテクスト文化の一例であろう。

場に合った服装

- 都会と農村、若者と老人、外出着と普段着、通勤用とレジャー用、春夏秋冬、時と場合によって、日本人は衣服を使い分けています(佐々木 1995 『日本事情入門』)



高校生の一日



制服は何を語るのか？

- 日本の交番の「おまわりさん」のイメージ



日本人が考える「お巡りさん」のイメージ

- A. 30代 女性 食品管理業 自分が違反をしていなかったとしても反論をすることできないくらい**威圧感**がある。
- B. 60代 男性 会社員 弱い人を助ける**頼りがいのある人。強い人。カッコいい。**
- C. 20代 女性 大学院生 制服を見てすぐ「お巡りさん」と分かる。困ったときに**信用**できる。
- D. 50代 女性 会社員 一目で分かる。**頼れる。**

浮かび上がるキーワード

- E. 50代 男性 会社員 **威圧的に**庶民を支配するイメージがある。
- F. 60代 男性 日本語教師 道を聞いてもきちんと正確に答えてくれる。世間的に**間違ったことはしない。**
- G. 60代 男性 日本語教師 市民に対しては**サービス精神旺盛で、やさしく**接してくれる。
- H. 40代 女性 日本語教師
- 制服を着ていなかったら、普通の人と誤ってしまう。注意されてもきかないかもしれない。

医者に対するイメージ

- 白衣さえ着ていれば！



医者のイメージ

- A. 70代 男性 無職 着ていない場合、医術に対する信頼性が失われる。
- B. 50代 女性 小学校講師 頼れる、安心できる。医者としてのプライドを感じる。
- C. 60代 女性 日本語ボランティア指導員 笑顔の医者...安心して相談できそうな感じがある。表情が陰しい医者...ちょっと質問することがためられる。
- D. 50代 女性 日本語教師 きれいな白衣なら、立派な人。命を守ってくれる人。きたない白衣なら、だらしない人。

信頼感 清潔感 権威

- E. 40代 女性 日本語教師 着ていないと、病院にいれば信頼するかもしれないが頼りなく思えるかもしれない。
- F. 60代 男性 日本語教師 医学知識がきちんとあつて、病気に関しては安心してまかせられる。
- G. 50代 男性 会社員 清潔感をアピールし、権威を与える。着ていなかったら、対等な感じがする。
- H. 50代 女性 会社員 信頼できる。医者らしく見える。
- K. 30代 女性 食品管理業 汚れていると逆に信頼感が落ちる。

ホテルのフロント

- フロントはホテルの顔



- I. 60代 女性 日本語ボランティア指導員 ホテルの顔として判断される。**私服なら、清潔感が感じられない。**アルバイト的なイメージが強い。
- J. 50代 女性 小学校講師 **行き届いたサービス**をしてくれるホテルだと感じる。
- K. 70代 男性 無職 **着ていない...訪ねてきた人に不安を与える。**
- L. 50代 男性 日本語教師 客の立場に立って**自らの身を粉にして働く人**。ホテルのフロントは多数のお客さんにサービスをするホテルの顔である。
- M. 50代 男性 日本語教師 **着ているとホテルの品格を感じる。着ていないとお客さまと区別がつかない。**

きちんとしたサービス 安心

- N. 50代 男性 制服を着ていると、**安心感があり、信頼感**があり、**きちんとしたサービス**を受けられそう。ベルボーイ区別できる。小さなホテルなら制服を着ていなくても家庭的な暖かい雰囲気がある。
- O. 30代 女性 日本語教師 ホテルのフロントが制服を着ていると**クレジットカードを安心して預けられる。**
- P. 40代 男性 日本語教師 サービス精神があり、**気配り**ができて、きびきびしていて、情報を豊富に持っている感じがする。
- Q. 40代 女性 日本語教師 **丁寧な応対に感心した。**
- R. 40代 女性 日本語教師 **私服だと分かりにくい。制服だとそのホテルの格式が分かるし、親切そうにみえ、安心して話かけられる。**

客室乗務員

- もし制服を着ていなかったら、



客室乗務員—キーワードは？

- A. 70代 男性 無職 私服の場合、緊急案内の重要性が損なわれる。
- B. 50代 女性 会社員 **カッコいい、英語がべらべら。**
- C. 60代 女性 日本語ボランティア指導員 憧れをもつ。
- D. 50代 女性 日本語教師 **やさしい、暖かい、信頼。**
- E. 40代 女性 日本語教師 **着ていないと...きりっとした感じがなくなる。**

きびきび、てきぱき、洗練

- P. 40代 男性 日本語教師 サービス精神に富み、気配りができ、**きびきび**していて、感じがよい。
- Q. 40代 女性 日本語教師 **てきぱき**と誘導したので、けがの人がなかった。
- R. 40代 女性 日本語教師 **いろいろサービスを行ってくれるので制服だとすぐに安心して頼めるが、私服だと客は不安になる。**
- S. 30代 女性 日本語教師 **洗練**されていて、乗客との距離感をうまくとっているのを感じる。サービス業のプロ中のプロ。

板前・コック・シェフ

- なぜ白？



板前・コック・シェフの「制服」

- C. 30代 女性 食品管理業 清潔感が重要、築地のお寿司屋さんでは職人のYシャツ、ネクタイ、白衣という姿が礼儀と清潔感があって、日本らしいなと思った。
- D. 50代 女性 日本語教師 綺麗な白なら、せいけつ、職人かたぎ。汚れてたら。こんな店で食べたくない
- E. 40代 女性 日本語教師 仕事ができそうなイメージを与える。
- F. 60代 男性 日本語教師 清潔そうで、食品の衛生を管理や調理の手順もしっかりしていそう。料理もおいしそう。

職人氣質・自信・おいしそう

- G. 50代 男性 会社員 勢いのある様子が伺える。職人氣質を感じさせる。着てない場合は料理が落ちるような気がする
- H. 50代 女性 会社員 プロフェッショナル、自分の仕事に自信を持っている。ユニホームを着ていないと、仕事までいい加減に見える。
- I. 20代 女性 大学院生 作った料理に自信がある。
- J. 60代 男性 会社員 清潔なイメージ 料理がおいしくみえる。

神社の巫女

- 学生でも「馬子にも衣装」



巫女バイトはおいしい！

- 巫女バイトの募集する時期は、年末年始・お正月前に集中
- 巫女バイトの募集をしている東京の神社は中でも人気が高く、募集人数が多い。
- 神社では、巫女バイトは平常時は募集しておらず、初詣客でにぎわう大晦日からお正月にかけての時期にバイトとしての巫女さんを短期で雇う。

巫女の仕事内容は？



巫女の仕事は販売・サービスなど

- 正月の巫女バイトの仕事内容(奉仕)
- 1、参拝客に対するお札やお守りなどの販売(授与)
- 2、絵馬やその神社で販売しているグッズも扱う。
- 3、大きな神社なら、案内所、御神酒所など
- 4、参拝客に甘酒やみかんをふるまう。

しかし、巫女さんの服を着れば

- A. 60代 女性 日本語ボランティア指導員 着ている...**おごそか**、**清楚**、**神聖**。着ていない...神聖な感じがしない。
- B. 50代 男性 会社員 白装束に赤い袴を着しているイメージ。**おごそか**に神に任えるイメージ **ストイック**な感じ。着ていなければ、ただの人。
- C. 50代 女性 小学校講師 **清楚**、**聖なる**感じ、**おしとやか**、**誠実**。
- D. 70代 男性 無職 着ていないと、新宿の母みたいで、信頼性に欠ける。

清楚・純粹・凜、清らか、聖なる

- E. 50代 女性 日本語教師 ひかえめのお化粧なら、**清楚**、**純粹**、**凜**。現代っ子のお化粧なら、ああ、アルパイとか。
- F. 60代 男性 会社員 **聖なる清らかな**イメージ白と赤の色でおめでたいイメージ。
- G. 20代 女性 大学院生 神様に仕えるという**聖なるイメージ**。
- H. 50代 女性 会社員 **清潔**な感じがする、神につかえる女性。

清らか・神秘的・ひたむき、」

- J. 30代 女性 食品管理業 清らか、神秘的。
- K. 40代 女性 日本語教師 着ていることでありがたみが出る。
- L. 50代 男性 日本語教師 神聖で、ひたむきに 神様に仕える女性 田無神社の秋祭りで巫女さんの姿が珍しかった。
- M. 50代 男性 日本語教師 ごりやくがありそうに見える。
- N. 30代 女性 日本語教師 巫女さんの制服を着ていると、清楚な気がする。日本語が上手ではない外国人が巫女の制服を着ていると変な感じがする。

- O. 40代 男性 日本語教師 清浄で厳肅で静かな印象が強い。神々しく見える。
- P. 40代 女性 日本語教師 恭しい。
- Q. 40代 女性 日本語教師 神秘的、姿勢だと神秘的でしとやかな人に見て心が引き締まるが着ていないと、神との仲間たちの手伝いをしてもらえる気がしない。
- R. 30代 女性 日本語教師 古代のにおいを感じる。
- S. 50代 女性 日本語教師 優雅で物静かな大和撫子に見える。

単なる従業員

- I. 60代 男性 日本語教師
- 実は一時的にバイトしている人だけの人たちだと知らなかった。昔は巫女になるなんて、清らかな人だなと思っていたが、知ってしまった今は神様とは関係のない「単なる従業員」と見えてしまいます。

ノンバーバルな制服が多くを語っている。

- 日本文化に詳しいコミュニケーションの学者のコンドン
は、日本人の服装に関して。日本人は個性より集団志向
が強いために、「制服」に関する重要度が高いと指摘して
いるが、日本人が集団の中で、目立つのを避け、自己抑
制した地味な服装を着るのも、この集団志向が原因と考
えられる。
- (Jr ジョン・C.コンドン、斎藤美津子 (1992/8))

同人物？

- 同じ人物の印象もユニホームによって
- 印象が変わる。



人間は外観から判断される？

- 外観によって、人は社会的な地位や年齢、性、職業など
を表すばかりではなく、属するグループや性格なども表明
している。
- どのような外観が何を意味するかは、状況や文化によっ
て異なる。
- 「外観」によって、人間は判断される。
- 日本社会ではそれが一層強いと言えるのかもしれない。

プラス概念を表すキーワード

- 信頼感 清潔感
- きちんとしたサービス 安心
- きびきび、てきぱき、洗練
- 職人氣質・自信・おいしそう
- 清楚・純粹・凜、清らか、聖なる

人間はプラスイメージで判断されたいという
根源的な欲求がある

- 外国人も日本での滞在が長くなると、「自由な服装」でいるよりも、「日本人がプラスイメージをもって見てくれる服装」に自らの装いを変えていく傾向が強い。
- ウクライナの社会はどのようなだろうか？
- ご清聴ありがとうございました。



【国際大会 2013 in ウクライナ シンポジウム：翻訳から見たジェンダー表現の諸相 要旨】

翻訳におけるイノベーションと想像力のインタープレイ

ジュデット・ヒダシ

原文、起点テキストには、暗示的な、明確に表現されない、目に見えない次元が存在する。それらは、例えば、テキストの奥に潜む文化的な示唆や、テキストの中に織り込まれた文学的（あるいはその他の）暗示、（当該環境では周知のことであるために）起点テキストの中では明確に表現されない暗示などで、これには性に関わるものも含まれる。目標言語で最も理想的な解決策を見出すため、翻訳家に非常に大きなイノベーション能力が必要とされていることは、想像に難くない。その一方で、ある文学作品を完全に受容するには、読者にも大きな想像力が必要とされる。ある翻訳が成功したかどうかを決めるのは、この2つの幸運なインタープレイにかかっている。

翻訳に対する期待は文化によって異なる。西洋では、従来、翻訳に求められてきたのは、第一に訳文（目標テキスト）の読みやすさ、なめらかさ、オリジナルは異言語で書かれた作品（起点テキスト）であることを読者に忘れさせるような自然さであった。今でもほとんどの翻訳家は、この理想を求めて苦労を重ねているはずである。一方、ハンガリーの読者にとっては、文化的に見て遠くにある文学作品の場合、起点テキストの「持ち味」、オリジナルの「エキゾチシズム」をほのかに感じさせるようなハンガリー語への訳出を行う翻訳家が高く評価される傾向がある。これは、考え方の違いなのであるが、翻訳の本質に関わる重要な観点である。なぜなら、このような考え方の違いによって、訳出された目標テキストはまったく異なるものとなってくるからである。一方の訳出では「異質性」が全く感じられない。もう一方の訳出では、日本語らしい表現など、起点言語のテキストが持つ文化的特性を感じさせるような要素が意図的に訳出に反映させられている。後者の戦略を取った場合、翻訳の受容は困難を伴う。文化的には異質でないためにきわめて簡単に消化できる訳出に比べ、読者は翻訳を理解・受容するためにより大きな努力を強いられることになる。起点言語の文化の痕跡が残る目標言語のテキストを理解することは、当然のことながら難しい。とはいえ、それだからこそ、読者の能力を試し、読者に挑戦をしかけ、読者を考えさせるという意味で、読書の楽しみはより大きなものとなる。これにより受容の過程はより活性化させられるのである。つまり、受容は読者の想像力に拠りかかっている。読者がテキストを深く理解しようとするならば、活性化せざるをえない想像力に訴えることになるのである。

『雪国』が川端康成の著名な作品の一つであることは、誰も異論を挟まないだろう。この小説の執筆は1934年から始まり、一時期、筆を休めることも何度かあったが、1937年まで執筆が続き、その後、発表直前の1947年にもう1章加筆したものである。1957年にエドワード・サイデンステッカーが翻訳し（豊田四郎監督が映画化したのもこの年であったが）、これを機に『雪国』は、1968年にノーベル文学賞を日本人として初めて受賞するまで、まさに世界を席卷する旅に乗り出したと言える。『雪国』がこのワークショップでもしばしば取り上げられるのも偶然ではない。既に翻訳された言語は世界33ヶ国語に上っているからである。ハンガリー語の翻訳出版は1969年のことであった。

ハンガリー語は、他のヨーロッパ諸言語とは異なり、日本語に似て文法的性が存在しないのだ

が、「性」が重要な役割を占める言語の翻訳は難しさを伴う可能性が高い。なぜなら、そのような翻訳の場合、例えば、翻訳者は起点テキストにはない社会的あるいは年齢的な他のパラメーターを使用せざるをえないからである。では、もし目標言語で性が作り出せるとすれば、どのように作り出せるのであろうか。また、目標言語への翻訳において性を具体化した場合、原著者の意図を歪めることにはならないだろうか。日本語の場合、この点で特殊である。なぜなら、明示的に性が記されることはないが、暗示的には敬語の使用を通じて、性的属性を明示化することができるからである。ハンガリー語の翻訳では、ジェンダー代名詞が存在しないことは理解の妨げにはならないが、表現スタイルの貧弱さをもたらす。たとえば、ジェンダーを示す終助詞「わ」は、ハンガリー語には存在しない。

ハンガリー語への翻訳では、『雪国』全体の物語の背景をなしている日本の社会や文化に関する知識が読者に不足しているという事実が、翻訳家及び読者の技量を試す最も大きなチャレンジとなる。これは、恐らく、他の言語への翻訳に際しても同様であったと思われる。そもそも作品のタイトル自体が問題を含んでいる。『雪国』というタイトルはおとぎ話のイメージを読者に抱かせるものであるが、それ以上にハンガリー人が想像する日本の風景と全くかみ合わない。もう一つの基本的な語彙の問題として「温泉芸者」を挙げることができる。温泉芸者に対応するハンガリー語の語彙は存在しない。ハンガリーに温泉がないわけではなく、その反対にハンガリーには非常に多くの温泉があるのであるが、温泉からハンガリー人が連想するのは、日本人の温泉にまつわる連想と全く異なっている。しかし、最も大きなチャレンジは、「芸者」という語であろう。

「芸者」という言葉は、日本以外の文化では、殆ど全ての文化において誤解あるいは誤訳されていると言えるだろう。つまり、ここで述べたいのは、ある種の「レアリア」が存在しないこと、またその語が言外に持つ含意、コンノテーション（語にまつわる社会文化的意味）の知識が不足していることにより、作品のコンテキスト全体が不十分なものとなることである。

ハンガリー語への翻訳において、翻訳家は明示化を行っていない。例えば、ススキや萱、桐などハンガリーにはない木や植物というレアリアの名称に説明を加えておらず、日本語をそのまま使用している。これは、特に問題とはならない。なぜなら、読者は、想像力によりおおよそその理解が可能だからである。一方、「地蔵」という語、概念に関しても説明を加えていないのは、問題である。「地蔵」の持つ意味を理解しない場合、「死」と「子供」のモチーフの連結の可能性に対する含意がなくなってしまうだろう。また、「縮み」に関しても説明がないのは不満が残る。川端のメタフォーラでは、この語にも意味を込めているはずである。さらに、着物や浴衣、寝巻き、羽織など日本特有の衣類の訳出も非常にぎこちなく、稚拙なものが多い。例として挙げるならば、「寝巻き」は「夜の着物」と訳出されている。「裾」は、着物の裾のことであり、原典では20回程度使用されている。もっとも、「山裾」という語でも使われているのだが、これらはきわめて日本的な繊細かつ洗練された語句であり、その繊細さ・洗練さを読者が感じ取るには、日本の社会文化的な環境、その語句の持つニュアンスや背景をホリスティックに理解することが必要になってくる。

このような翻訳の不完全性にもかかわらず、『雪国』のハンガリー語訳は、原典の持つ詩情や繊細さの多くをハンガリー語への訳出でも再現させることに成功している。その証拠にハンガリーの読者の間でも好評を博した。逆説的だが、このハンガリー語訳の成功に貢献したのが異質性であったといえよう。そこにハンガリーの読者はある種のロマンチックなエクゾチシズムを感じたのである。『雪国』のハンガリー語訳は、「異質性」と「親和性」を読者に伝えることに成功している。

(Judit Hidasi ジュデット・ヒダシ ブダペスト商科大学教授)

【国際大会 2013 in ウクライナ シンポジウム：翻訳から見たジェンダー表現の諸相 要旨】

翻訳における付加と削除

矢野安剛

翻訳について

翻訳とは、ある言語のテキストを自然なコンテキストから取りだし、異質の言語的、社会文化的コンテキストのなかで「再構築」という難しい作業であり、時代により、翻訳者により異なる。完全で、究極の翻訳というものは存在しない。翻訳は、目標言語のなかに表面的な相当語句を見つけ、目標言語の文法構造とその使用法を知ることが前提であるが、言語的、文化的に異なる原語と目標言語が同じコミュニケーション目的を達成するのにどのように異なった方法を取るのかを知ることが重要な前提となる。つまり、社会言語学者のヴィエルツビッカが ‘...the lexicons of different languages do indeed suggest different conceptual universes, and that not everything that can be said in one language can be said (without additions and subtractions) in another...’ (Wierzbicka 1992, 20) と述べているように、言語間翻訳では何かを付け加えたり、何かを省略したりすることが必要になるということである。

カチュル・スミスは、コミュニケーションは文意を理解し (intelligibility)、発信者の伝えたい意図をくみ取り (comprehensibility)、そして解釈する (interpretability) という3つの過程を経ると述べている (Kachru and Smith 2008, 61-64)。翻訳も同様の過程を経ると言える。読者がどう解釈するかによってはじめて原著者の意図が伝わるという見方に立てば、目標言語を通して読者がどう解釈するかが重要になるが、その解釈には読者の背景文化に影響される部分が多い。そのため、グローバル化され、言語や文化が共有される部分が急速に増えている今日でさえ、大きな問題として残っている。翻訳家のケンブリッジ大学のアンディー・マーティン教授は ‘... translation is always an interpretation’ と述べ、英語をフランス語に翻訳する際、1950年代のニューヨークの sexist humor を1990年代のパリの political correctness に update している例を示している (International Herald Tribune, 2013.1.30)。1925年から1933年にかけて、アーサー・ウェイリーが「源氏物語」を英訳した際、かなり自由に意識していて、平安時代の女房たちのしとねを、直接床にマットレスを敷いて寝ると直訳しては貴族階級の人々の暮らしを伝えられないからと、天蓋付きのベッドに置き換えたりしている。

また、日本での食事風景を「彼女は優雅にお茶碗を持ちあげて...」と韓国語に翻訳するとマナーを弁えない無教養のしぐさと取られるという。逆に、韓国でお茶碗をテーブルに置いたまま食べるのを日本語にそのまま翻訳すると、犬のような食べ方だと軽蔑される。一方の文化風習で良いとされていることがもう一方の文化では悪いとされている場合などけっこう多い。そうだとすると、目標言語圏の読者に原著者の意図を伝えるためには想定読者が住んでいる社会の文化風習に置き換える、いわゆる「翻案」(transliteration)がある程度必要になってくる。もちろん、正確さを要する科学技術系の論文や学術文献の場合は出来るだけ原著に忠実に翻訳し、注で言語差、文化差を解説する必要がある。

長谷川は、翻訳とは原語のテキスト上の慣習を保つことを考慮しながら、全テキストを目標言

語のまとまりのあるテキストに「再構築」(recreate)することだと言っている (Hasegawa 2012, 5)。翻訳とはまさにイタリアの諺にあるように、Traduttore, Traditore! (翻訳者よ、汝は裏切り者なり)なのである。言語形式の不備はつねに語の借用や新造で補われてきたが、意味内容は表現形式から完全に切り離すことはできないし、意味内容なしには言語形式は無意味である。詩歌、広告、だじゃれやごろ合わせなどを他言語に翻訳するのが不可能に近いのもそのためである。

言語Aを言語Bに翻訳するのには言語Bの母語話者が最適と言われているが、英語のように母語話者だけでなく、ひろく非母語話者に話され、読まれている言語の場合、非母語話者の翻訳の方がいい場合もある。それは、あまり凝った複雑な文章を書かないし、イディオムやメタファーなどアングロ-アメリカン文化固有の表現を多用しないので、世界中の非母語話者にも読みやすいからである。とは言え、母語話者には敵わない部分が多いのは認めざるを得ない。

翻訳の方略

翻訳にはいろいろな方略 (strategies) があるが、5つほど挙げてみよう。

第一は、原語の意味を文字通り訳出することである。たとえば、言語的、文化的、地勢的に大きく異なる日英語でも、概念世界 (conceptual universe) を共有している部分もあり、直訳できる。以下はその例のいくつかである。

苦い経験	bitter experience
法／規則を破る	break the law/rules
深い／浅い知識・眠り	deep/shallow knowledge・sleep
自分の目を疑う	can't believe one's eyes
～に目をつぶる	close one's eyes to～
時代の流れ	the flow of the time
芯まで腐っている	be rotten to the core
鋭い目・痛み	sharp eyes/pain
死ぬほど退屈する	be bored to death

(Yano 2010, 147)

そこでは、経験を「苦い／bitter」で形容し、法律や規則に「破る／break」を用い、知識や眠りの程度を「深い・浅い／deep, shallow」で示すなど、日英語で発想が共有されている。

第二は、翻訳するより、説明する方がいい場合である。たとえば、「内弁慶」を in-Benkei と直訳してもその意味するところは英語話者には伝わらない。むしろ bossy at home and timid outside と説明する方がよい。女性を追っかけまわしている男を「彼はベルルスコーニだ」と言うのも He is Berlusconi.ではなく He is a womanizer.と説明した方がよい。読者みんなが彼のことを知っているとは考えられないからである。

第三は、他の表現で置き換える方略である。概念世界を異にする場合で、その表現は文化固有のイディオムやメタファーの形を取る場合が多い。「茶柱」は a tea stalk floating vertically in one's tea cup と直訳しても意味は理解してもらえない。その意味するところを汲み取り、a lucky omen

と言い替えなければならない。「孫娘の姿に目を細めた」は日本語では嬉しさや喜びの表現であるが、英語の *narrow one's eyes* は疑いや怒りの表現である。このように同じ表現が言語によって意味するところが異なる場合も *He smiled at the sight of his granddaughter.* などと言い替えることが必要になる。同様に「足を引っ張る」を *pull one's leg* と直訳すると「からかう」という意味になるので *prevent/block someone from doing something* とでも説明するしかない。「油を売る」も *waste time* と説明しなければならない。以下は外国の研究仲間から集めた「とても易しい」の文化固有の表現の英訳例である。

a piece of cake	(英語)
like doing ... with your eyes closed	(ギリシャ語)
like taking a walk	(イタリア語)
like eating vegetables	(中国語)
like turning your palm	(ヴェトナム語)
like eating rice cake lying	(韓国語)
like eating banana	(タイ語)
朝飯前	(日本語)
(Yano 2010, 146)	

第四は、省略する方略である。たとえば、電車で羽田空港へ行くのに「京急羽田線で行く」はその線を使うことが重要な意味を持たない限り、*go by the Keikyu Line train* は余計な情報なので省略し、単に *by train* とする。

第五は、逆に情報を付加する方略である。「蕎麦」や「畳」などのように、*soba, tatami* だけでは外国人に分かりにくいと思われる場合には *soba noodles, tatami mat* のように情報を補い、理解を助ける。

日本文学作品の英訳における方略の実例

もちろん、日本語と英語という二つの言語は多くの概念を共有しており、ほとんどの場合、原語の意味を文字通り訳出するという第一の方略が使われる。そういうなかで、時として、やはり何かが失われ、何かが補われている。日本文学作品の英訳からいくつか例を拾い、観察を加えてみよう。最初は明治の文豪、夏目漱石の『坊ちゃん』の一節に見る地方方言の喪失である。

「あまり早くて分かんけれ、もちっと、ゆるゆる遣って、おくれんかな、もし」と云った。おくれんかな、もしは生温るい言葉だ。

(夏目漱石『坊ちゃん』, 27)

“You’re speaking too fast. I can’t understand what you say. If it’s all the same to you, could you speak just a bit more slower, like?”

“‘If it’s all the same to you?’ ‘Like?’ What kind of spineless language is that?...”

(A. Turney, *Natsume*, 3)

この英訳では、愛媛県の松山地方の「方言性」は失われている。強いて探せば、*a bit more slower*

の文法的破格に坊ちゃんが見下している田舎者のニュアンスが示されているくらいである。
thirty-third street の[th]を[t]と発音するニューヨークのブルックリン訛りを視覚化したり、nineteen eighty-nine を「ノインティアイティノイン」のように発音するロンドンのコックニー訛りを視覚化するなどして置換えて方言性を出すこともできたであろうが、訳者はあえてそうしなかった。世界の英語使用者の 80 パーセント以上が非母語話者である現状 (Beneke 1991, 54)。を考えると、ひろく世界中で読まれるには英語母語話者文化に特化した置換えは必ずしも得策ではないからであろう。

次は、川端康成『伊豆の踊子』の一節に見る社会方言、とくに敬意表現の喪失である。

「おや、旦那様お濡れになつてゐるじゃございませんか。こちらで暫くおあたりなさいまし、さあ、お召し 物をお乾かしなさいまし」

(川端康成『伊豆の踊子』, 10)

“But you’re soaked. Come in here and dry yourself.”

(E. G. Seidensticker, *The Izu Dancer and Other Stories*, 10)

原語の「旦那様」や「お--になる」の敬意構造や「...なさいまし」などの当時の社会の下級階級の女性のへりくだった社会方言が英訳では完全に喪失している。英文だけ読めば、まったく対等な関係のやりとりである。Would you please come in here and dry yourself, sir? とでもしたいところだが、日本文学に造詣の深いサイデンスティッカーなので意図的に対等な人間関係に訳出したのかもしれない。

第三に、村上春樹の『ノルウェイの森』の会話に見る性差語を見てみよう。

「それは本当に一本当に深いのよ」...

「本当に深い。でもそれが何処にあるかは誰にもわからないの。このへんの何処かにあることは確かなんだけど」...

「でもそれじゃ危くってしょうがないだろう」

(村上春樹『ノルウェイの森 (上)』, 13-14)

“It’s really, *really* deep,”... “But no one knows where it is,”... “The one thing I know for sure is that it’s around here somewhere.”...

“Then it must be incredibly dangerous,”...

(J. Rubin *Norwegian Wood*, 5)

この英訳も女性特有の終助詞「のよ」「の」や男性特有の「だろう」は喪失され、男女の区別は表現されていない。英語の場合、女性はいわゆる good, great などの hard [g]を避けて nice, wonderful, fantastic, terrific などの柔らかい響きの語を多用すると言われているので、そういう語句の使用ができたかもしれない。

第四に、翻訳をはずれて、日本語そのものから性差語が消えつつある現状を若い作家の作品か

ら例証してみよう。まず、すばる賞受賞作品の金原ひとみ『蛇にピアス』を見てみると、18歳と19歳の登場人物の会話は全編を通して性差的に中立な表現が圧倒的である。ごくまれに以下のような女性言葉が出てくる。

「これがいいの。シバさん、お願い」

(金原ひとみ『蛇にピアス』, 37)

これは、刺青師の男性に強引に刺青を入れてほしいと頼みこむシーンで、性的関係のある相手に「女性性」をアピールするためにふだんは使わない女性言葉の「の止め」を用いている。

「うっさいわね、別に酒飲みたい訳じゃないわよ」

(金原ひとみ『蛇にピアス』, 67)

これは刺青を入れる前の1週間は飲酒を禁じられていたのにべろべろになるまで飲んでしまい、咎めた恋人に苛立ちをぶつけている場面である。恋人への甘えの表現として女性言葉の終助詞「わね」「わよ」が選択されている。このように、中高年の作家や脚本家が思い描く女性像では義務的だった女性言葉だが、使いたいときにだけ選ぶ「恣意的」使用に変わってきていると言えよう。

さらに、朝井リョウ『桐島、部活やめるってよ』に次のような対話の場面がある。

「...風助くんに謝れよ」

「ラブとライクの違いだよ」

「...ナンチャンのほうが言っとったよな」

「私、竜汰、好きだな」

「悲しみってね、心に非ず、って書くんだよ」

(朝井リョウ『桐島、部活やめるってよ』51-71)

「だよ」、「よな」、「だな」などの終助詞は男性言葉の典型だが、これは女子高校生同士の会話である。

一方で、男性が女性言葉の「の止め」を使うこともけっこう増えてきている。

「俺、残酷な言葉には詳しいの」

(金原ひとみ『蛇にピアス』, 16)

「それでも僕ら、どうにか謝って、また教えてもらおうとしたの」

(小澤征爾「レベル下げるな 本気見せなきゃ」朝日新聞 2013.3.6)

女性言葉についての意識調査を18歳から20歳の年齢層の大学生を対象に行った(2008年、早稲田大学教育学部「言語学」講義受講生約200名)。「嬉しいわ」のような終助詞「わ」を彼らは使わない。女子学生は自分は使わないと言い、男子学生は女子学生が使うのを聞いたことがない

と言う結果であった。彼らの意識では、使うのは 40 歳代以上の女性である。また、「昨日パリから戻りましたの」のように「の止め」を使ったり、「またお茶ご一緒しませんこと」のように「こと止め」を使うのは 60 歳代の上流階級の奥様だと見ている。今から 40 年後、彼らが 60 歳代になったとき、上流階級の奥様になっている者もいるであろうが、その頃までに女性言葉はもう消失してしまっているのだろうか。

上記のいくつかの観察は、佐々木の「今後ますますジェンダーレス化は進む。近いうちに『わ』は女性の使う終助詞で、『ぞ』は男性の使う終助詞」とは言えない、境界線のない時代がくるかもしれない（佐々木瑞枝『日本語ジェンダー辞典』, 504）という予測を裏付けている。だが、私たちは、古代ギリシャ劇の登場人物のように様々な役を日常的に演じ、その都度言葉遣いを変える。親には息子や娘の役を、自分の子どもには父親や母親の役を、職場では上司には部下の役を、同僚には同僚の役を、部下には上司の役を、店やレストランでは客の役を、というようにさまざまな役を演じ、その都度言葉遣いを変えて 1 日を過ごす。佐々木の予測のように性差を意識しない言葉遣いをする時代が来るかもしれないが、それでも恣意的に使いたい時は使うという形で残る可能性もある。意外に性差語は、差別意識抜きの表現として生き残るのではないだろうか。

日本語の英訳における付加

日本語の英訳において失われるものを文学作品を例に観察してきたが、逆に何かを付け加える場合もある。コミュニケーションでは、聞き手・読み手が言語内、言語外コンテキストから復元できると話し手・書き手が仮定した場合、その情報を省略したり、代用形に置き換えたりする (Yano 1977, 1984)。たとえば、日本語の場合、無標 (unmarked) の場合「ゼロ形式」を用い、有標 (marked) の場合「代用形」(コソアド系、述部代用形ダ・デスなど) を用いるが、英語では文法上代名詞句 he, she, it, they、代動詞句 do、代形容詞句 such、代副詞句 so などの照応詞を用いなければならない。いずれも完全形よりも簡潔な形態、担う情報量も少ないので「コミュニケーションにおける経済性の原則」に基づいている。たとえば、次例では

「浴室のシャワーでもあびたら……」

「そうするわ」と、女は浴室のなかに消えた。

(星新一『ノックの音が』, 9-10)

“If you took a shower in the bathroom…”

“I’ll do just that,” she said, and disappeared into the bathroom.

(S. H. Jones, *There Was a Knock*, 10)

日本語では非強調文では無標のゼロ代名詞句で言語的に表現されない「あなた」が英語では you、「わたくし」が I と義務的に照応詞として表現されている。一方、強調、対照、(指示関係の) 明確化を表す強調文では有標の代名詞句 が使われる。

「あなたは、どなたなのですか」

「あなたも、お飲みになる……」

(星新一『ノックの音が』, 12-15)

“Just who are you?” Kunio asked again.

“Would you like some too?” the woman asked.

(S. H. Jones, *There Was a Knock*, 10)

上に述べた情報の復元可能性は飽くまでも話し手・書き手の「仮定」であって、失敗する場合も多い。次は2人の女性AとBの会話片で、Aの夫の飯野は恋人が起きて家出しており、Bがためらった後、女と飯野はその後どうなっているのかと聞く場面である。

A:「捨てられたんです」

B:「えっ、誰が、どっちに」

A:「飯野が女にですよ」

(瀬戸内晴美『冬の樹』)

Aは、「捨てられたんです」の主語は自分の夫である飯野だとBが理解できると仮定していたのだが、Bの「えっ、誰が、どっちに」という反応で仮定が成り立たなかったことを知り、急いで「飯野が女にですよ」と情報を提供することによってリペアしている。指示関係の明確化の失敗の例である。

視点の移動

ところで、川端康成『雪国』の冒頭の文、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」はあまりにも有名であるが、サイデンスティッカーの英訳では“The train came out of the long tunnel into the snow country” (Seidensticker, *Snow Country*, 3)となっている。「抜ける」という語は「通路（何かの中）を通して、向こう側へ出る」（新明解国語辞典第7版）という意味である。主人公の視点は汽車の中にあり、乗っている汽車とともにトンネルに入り、それを「抜けて」銀世界の雪国へ「出る」のである。無標文なので、「コミュニケーションにおける経済性の原則」に基づいて、「私が乗っている汽車は」が言語的に表現されていないゼロ形式を取っている。サイデンスティッカーの英訳で *came* が使われているのは明らかに誤訳である。移動動詞の *come* は話し手／書き手の現在の時間的・空間的位置への移動であり、この英訳では当然ナレーターは雪国のある点に居て、トンネルから汽車が出てくるのを眺めていることになる。正しくは *The train went through the long tunnel into the snow country* とすべきであろう。ただ、日本文学に造詣の深いサイデンスティッカーである。視点を移動したのには何かの意図があったのであろう。文学作品にはそのような「翻案」が許される場合がある。

翻案と言えば、『源氏物語』を英訳したアーサー・ウェイリーの *The Tale of Genji* (1921-33)は、加筆、省略、置き換えなど極めて自由に翻訳したことで知られている。上にも触れたが、平安時代の女房たちが直接床に寝床を敷いて寝ていたり天蓋付きのベッドに置き換えている。事実即して訳出するよりも「貴族階級」を意識したのだろう。かつて、元首相の吉田茂が白足袋を履いて会見に臨んだのを、*white socks* と直訳するとテニスにでも行くと思われるのでフォーマリティを表わすために *white gloves* としたという話を聞いたことがある。翻訳には同様の柔軟さが求められるのであろう。

規則化、一般化への流れ

私は、ここ数年不規則な表現が規則的なものへ、特殊な表現が一般的なものへと変化していく言語現象を、日英語を対象に観察してきた。言葉の学びやすさ、使いやすさの観点からそれは普

遍的な傾向だと見ている。いくつか例を挙げてみよう。

まず、最近よく目にし、耳にする、形容詞化接辞の「的」と「化」の用法の広がりを見てみよう。

この製作は戦略的に拙かった。

安定的な外交関係を構築しなければならない。

私（わたくし）的な見方をすれば...

気持的には迫ってきた。

AKB 的人生論

体調的にはまだ万全ではない。

整合的に、説得的に説明する道德原理の体系を構築する。

当面はまず、事態を安定化させる政治・外交的なメカニズムを作る。

お互いの利益が最大化できるように対立をコントロールしようとしている。

一般入試も特色化させているのが東京工業大だ。

資源の最適な配分によってこそ自己のリスクは最小化できる。

理論の最適化をはかる。

取り調べを可視化する。

高齢者は重症化する場合がある。

規則的な形容詞化接辞であり、ほとんど制約がない。規則的であるゆえに日本人にも外国人学習者にも学びやすく、発展的に使いやすい用法である。じゅうらい、「説得するように」「安定する／させる」「最小にする」などと言っていたのが、「的」「化」に収斂されていくようである。これも規則化の一現象である。

次に、複数接辞「-たち」を見てみるが、これは、もともとは神や天皇、高貴な人々に使う敬意の接辞であった。

玉ほこの道の神たちまひはせむ吾（あ）が思ふ君をなつかしみせよ。

万葉集 17 (8 世紀半ば)

親たちの顧みをいささかだに仕うまつらで。

竹取物語 (9 世紀初期)

このかくほのかなる女たちの御中に弾きまぜたらむに。

源氏若菜下 (11 世紀初期)

だが、時代が下がるとともに敬意は薄れ、対象も一般の人々、そして目下の者へと広がっていった。

子どもたち、お前たち、俺たち

(現代)

小鳥たち、魚たち

小石たち、スプーンたち

(現在)

時間たち、言葉たち、英語たち

(Yano 2011, 139)

現代では本来の「敬意」が消え、対象も「神、貴人」そして「人間」から動物、無生物、そして抽象概念へと広がり、対象への制約も消え去った。一般化の典型である。敬意・蔑みおよび対象の制約は「あなた方、皆さま方、野郎ども、虫けらども、きやつら、てめえら」など他の複数接辞に残っており、使い方は恣意的である。接頭辞「お-」から、長い使用を経て「敬意」が消えた例は「おしろい、おやつ、おみおつけ、おみおて」などにも見られるが、これも一般化の例である。

また、「二重『ヲ』格の制約」(柴谷・影山・田守 1982, 402-4)、'the Double *wo* Constraint' (Shibatani 1990, 310) の用法を見てみよう。本来、「太郎が英語を勉強をする」のように、単文内に目的格「ヲ」を重ねることはできないのであるが、昨今は

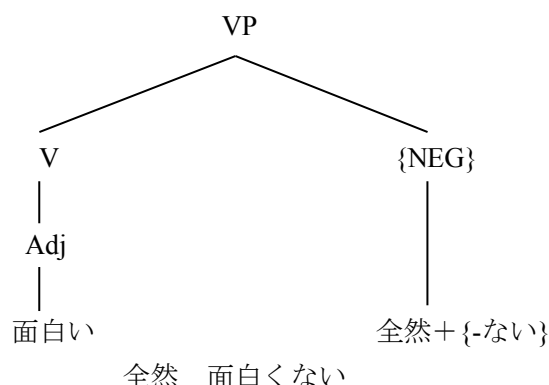
国民の生活を再建をしていく。

総理のご決断を支持をしたい。

靖国神社参拝を断念をするつもりです。

のように頻繁に耳にするようになった。私はこれを空虚な内容を補うために自分の発言に重みをつけるため政治家が使う「虚辞の『ヲ』」と呼んでいるが、最近是一般化が進み、「電車を発車をさせます」などといういろいろな場で耳にするようになった。日本語のモデルと目されている NHK のアナウンサーまでが「二種類のガムをかんで、かむ力を測定をしました」(2010.6.6 NHK テレビ 1 午後 7 時のニュース) というまでになっており、そのうち書き言葉にまで浸透し、いずれは正用法となるのであろう。いずれ、「虚辞の『ヲ』」改め、「強調の『ヲ』」として市民権を与えねばなるまい。これも制約を撤廃する一般化現象である。

さらに、副詞の「ぜんぜん」は否定文でしか使われない「否定制約」(Neg Constraint) がかかっているのだが、この「否定制約」がじょじょに適用されない場合が増えてきて、若者の会話で「ぜんぜん面白い」などを耳にすることが多くなってきた。



すでに、若者だけではなく、一般に使われ始めている。いずれ、副詞「全然」への否定制限も撤廃されるか、恣意的な選択肢になり、一般化に飲みこまれるであろう。

くわえて、じゅうらい「やったり、もらったり」の対象は主として具象物で抽象概念に使うケースはあまりなかったようであるが、近年「勇気を貰う」「元気を貰う」「自信を貰う」「やる気を貰う」など抽象概念に使われているのをよく耳にする。これもヤリ・モライ動詞の対象の「具象物制約」をはずす、一般化の一現象ではないだろうか。

一般化現象は男性自称詞「俺」の用法にも見られる。昔は広く貴賤男女を問わず目上にも目下にも用いたが、現代では「俺とお前の仲じゃないか」のように男性が同輩以下の者に対して用いる、身内のインフォーマルな言い方になっている。「ぼく」などよりぞんざいな語で、公の発言をする際には用いない。だが、昨今、「俺は早く横綱になりたいっす」とか、「俺は自民党を立て直す使命感をもって選挙に臨みました」とか、政治家やスポーツ選手は公の場の発言に「俺」を頻用し、内外、公私の区別が曖昧になってきているが、先日小学6年生の作文に、この区別が完全に消滅している例を見た。

白石は、俺をどれくらい待たせれば気が済むのだろうかと考えていたところだった。

(独白：自分=身内)

たった今、絵の外の世界を見てきました。この絵は、俺がさっき言ったように盗まれていました。

俺はこの泥棒二人を捕まえるため、みなさんと一緒に作戦を練りたいと思います。

これは朝日学生新聞社児童文学賞と朝日小学生新聞賞を受賞した土屋絵梨子（当時小学6年生）の「ナポレオンの戴冠式」前篇（朝日小学生新聞 2013.4.29）のなかの文章であるが、内在化された語彙「俺」にはすでに内外・公私の区別が失われている。

最後に

このように、語法が規則化、一般化へ流れ、性差語の使用が減少し、敬意が消え、対象制限が無くなってきている。このように、使用制限が緩和され、一般化が進むのは日本語だけの現象ではなく、普遍的な現象であり、今後もこの傾向は進むと思われる（Yano 2011, 128）。英語でも、Band-Aid, Frisbee, Kleenex など特殊な製品の商標だったものが医療用絆創膏一般、皿型遊具一般、ティシュペーパー一般へ変化している。不規則の規則化、特殊の一般化への流れはまとめれば前述の「有標」から「無標」への流れである。この傾向は普遍的であり、時代を超え、言語差を超えて見られる現象である。「無標」は一般に使用が「義務的」(+obligatory) であるが、「有標」は完全に消えるのではなく、場合によって恣意的に使われる「選択的」(+optional) として残るであろう。日本語の「兄」「弟」は「生まれ順」(birth order) が義務的なのに対し、英語の brother は選択的で、年上・年下は問わない。だが、問わないがその区別がないわけではない。big brother, baby brother, elder/younger brother のように必要に応じて形容詞をつけて表現する。性差語もこの大きな流れのなかでだんだんと「義務的」から「選択的」な用法へと変化していくのではないだろうか。

資料

- 朝井リョウ (2012) 『桐島、部活やめるってよ』 集英社
- 金原ひとみ (2004) 『蛇にピアス』 集英社
- 川端康成 (1950) 『伊豆の踊子』 新潮社
- Kawabata Yasunari (Trans. Edward Seidensticker, 1974) *The Izu Dancer and Other Stories*. Tokyo: Tuttle.
- 川端泰成 (1947) 『雪国』 新潮社
- Kawabata Yasunari (Trans. Edward Seidensticker, 1956) *Snow Country*. New York: Vintage International.
- 瀬戸内晴美 (19) 『冬の樹』
- 夏目漱石 (1929) 『坊ちゃん』 岩波書店
- Natsume Soseki (Trans. Alan Turney, 1972) *Botchan*. Tokyo: Kodansha International.
- 星新一 (1972) 『ノックの音が』 講談社
- Hoshi Shin'ichi (Trans. Stanleigh H. Jones, 1984) *There Was a Knock*. Tokyo: Kodansha International.
- 村上春樹 (1978) 『ノルウェイの森』 講談社
- Murakami Haruki (Trans. Jay Rubin, 1987) *Norwegian Wood*. London: Vintage.
- Waley, Arthur D. (1921-33) *The Tale of Genji*, 6 vols.

参考文献

- Beneke, J. (1991) Englisch als *lingua franca* oder als Medium interkultureller Kommunikation. In R. Grebing (ed.) *Grenzenloses Sprachen lernen*. Berlin: Cornelsen.
- Hasegawa, Yoko (2012) *The Routledge Course in Japanese Translation*. London: Routledge.
- Kachru, Yamuna and Smith, Larry E. (2008) *Cultures, contexts, and World Englishes*. London: Routledge.
- Martin, Andy (2013) 'The treachery of translators.' *International Herald Tribune*, 2013.1.30).
- 佐々木瑞枝 (2009) 『日本語ジェンダー辞典』 東京堂
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The languages of Japan*. Cambridge University Press.
- 柴谷方良、影山太郎、田守育啓 (1982) 『言語の構造：意味・統語篇—理論と分析—』 東京：くろしお出版
- Wierzbicka, Anna (1992) *Semantics, Culture, and Cognition: Universal Human Concepts in Culture-Specific Configurations*. Oxford University Press.
- Yano, Yasukata (1977) Intersentential Pronominalization: A Case Study from Japanese and English, Unpublished PhD thesis, University of Wisconsin-Madison.
- 矢野安剛 (1984) 「英語の代名詞化と日本語のゼロ代名詞化：その平行性」『学術研究』 33号、57-69.
- Yano, Y. (2010) Culture-specific or Culture-general?: Cultural Differences in English Expressions. *Philippine Journal of Linguistics* 41. Manila: The Linguistic Society of the Philippines, 135-151.

Yano, Yasukata (2011) English as an International Language and 'Japanese English.' In
Sergeant, Philip, ed. *English in Japan in the Era of Globalization*. New York:
Palgrave Macmillan, 125-142.

(矢野安剛 やの やすかた 早稲田大学名誉教授)

【国際大会 2013 in ウクライナ 研究発表】

ウクライナ語訳三島由紀夫『サド侯爵夫人』における女性語表現

江川裕之

要旨

三島は『サド公爵夫人』は女性を意識した戯曲作品であると自ら述べている。ウクライナ語訳では女性語表現が可能か、三島の女性を意識した作品は翻訳によって、どう訳出されたかを考察した。一般にウクライナ語では女性語表現は少ないと考えられがちだが、その可能性に関して問題提起を行なう。

キーワード：女性語表現、女装文体、女らしさ

1.はじめに

日本語は豊富なジェンダー表現を用い、言語活動の中で性差を区別してきたと言える。終助詞の特徴に代表される女性語は、さらに役割語としての小説やドラマの「女装文体」(斎藤 2011)や「おねえ言葉」などにも派生している。「女らしさ」という肯定的な評価や「女のくせに」「女だてらに」否定的な評価も言語表現によってもたらされるところも多い。

佐々木(2000)は、日本語ジェンダー学会の設立趣旨で「ジェンダー(性差)に関連する日本語の表現をジェンダー表現と呼ぶとすれば、日本語のジェンダー表現は社会構造と密接に関係しており、社会的・文化的背景を含蓄している。」と述べている。

社会構造や文化的背景が異なる、あるいは類似する、外国語との対照研究は日本語ジェンダー研究にとって重要な課題である。例えば日本語文学作品のウクライナ語訳を研究することは日本語ジェンダー表現の特徴を知るためにも重要であると共に、ウクライナ語ジェンダー研究へも寄与することができるはずである。

2.先行研究

小原(2002)はロシア語と日本語の対照研究の中でジェンダー表現研究の観点からロシア語の「職業を現す名詞の性差」と「動詞過去形女性語尾-la」の例を紹介している。

ロシア語の職業を現す名詞の性差では、1) 女性形と男性形で意味がほとんど等価であるもの、2) 女性形と男性形で意味が異なるもの、3) 女性形は「男性形職業人の妻」を意味するもの、4) 女性形あるいは、男性形がないものという分類を示し、「職業を示す名詞は、一般的に男性形名詞が用いられる。職業によっては、女性形名詞がないもの、男性形名詞がないものもある。総じて、高度な職業では、男性形、女性形名詞の両方が有る場合には、男性形が使われることが多い。また、女性形名詞しかないものは、あまり権威の高くない職業に限られる。また、高級な職業を、女性形で表現する場合、皮肉の意味がこめられたりする。」とまとめている(小原 2002)。

動詞過去形女性語尾-laの考察では、小原(2002)はチャーホフの『桜の園』『ワーニャ叔父さん』の和訳を比較し「女性発言の過去形動詞の日本語翻訳では、新しい翻訳ほど、女性に特徴的な終助詞の数が減少していることが見られる。」と重要な報告を行なっている。

さらに吉本ばなな『キッチン』のロシア語翻訳における、男性から女性への性転換者の発言を分析し、女性の発言として、多くが女性形の過去形に翻訳されている一方、男性形の過去形が用いられている場合もあることに注目している(小原 2002)。これはロシア語ジェンダー研究にと

っても興味ある現象であろう。

3. 研究対象

日本語とウクライナ語との対照についても、同じ東スラブ諸語に属し近い関係にあるロシア語で小原の挙げた 1) 職業や地位を現す名詞の性差、2) 動詞過去形女性語尾 *-la* が同様にウクライナ語でも見られる女性語表現と言える。さらにその他女性語と言えるものには 3) *Vona rozumna.* [注1\)](#)「彼女は頭が良い」のような形容詞女性形、4) *Ya sama!*「私が自分で(する)」など自身を表す定代名詞など文法で規定されたもの、あるいは状況や個人差はあるであろうが 5) *Pani Oksano!*「オクサーナさん！」など女性を表す尊称 *Pani* の使用や 6) *Harna Kvitochka! Nalii ii vodychky.*「きれいなお花。お水をかけて」など指小形の多用など文体的な用法も考えられる。

3-1 三島の本作品に対する姿勢

三島は『サド侯爵夫人』を「女性によるサド論」であり、「サド夫人は貞淑を、夫人の母親モントルイユ夫人は法・社会・道徳を、シミアーヌ夫人は神を、サン・フォン夫人は肉欲を、サド夫人の妹アンヌは女の無邪気さと不節操を、召使シャルロットは民衆を代表して、これらが惑星の運行のように、交錯しつつ廻転していかなければならぬ。」(三島 1979:208) と解説している。

また「もっとも下劣、もっとも卑ワイ、もっとも残酷、もっとも不道徳、もっとも汚らしいことをもっとも優雅なことばで語らせること。そういう私のプランのなかには、もちろんことばの抽象性と、ことばの浄化力に関する自信があった。」(三島 1979:214) と述べ、自身の執筆能力を誇ると同時に、日本語の女性語表現の可能性を示唆している。

つまり本作品は 18 世紀のフランスの貴婦人たちの会話を、男優を使わず新劇の女優が日本語の上流階級の女性語を駆使することによって、恣意的に作り上げられた虚構の場とも言える。演劇の中の誇張された世界であり、女装文体の究極の形と言えるだろう。

そして三島は『わが友ヒットラー』は男性を、『サド侯爵夫人』は女性を意識した一対の戯曲作品であると自ら述べている。しかし同時に「女らしさの極致ともいうべき『サド侯爵夫人』の奥に、劇的理論の男性的厳格さが隠されており」と書いているように単なる「女らしさ」を追求したものではなく重厚な層をもつ性差の問題を提起している。

以上のように本作品は日本語ジェンダーの研究素材として注目されるべきものであり、本研究で取り上げた翻訳の対照研究だけにとどまらず、より多角的にも研究されるべきものでもある。

3-2 ウクライナ語訳

『サド侯爵夫人』は、ウクライナ語には 2001 年外国文学専門誌 *Vse Svit* にドゥビンスキーが (Micima2001)、2006 年にダンチェンコが (Micima2006)、それぞれ訳し出版されている。それぞれの翻訳においてウクライナ語では、どのような女性語表現が可能か、三島の女性を意識した作品は翻訳によって、どうなったかを考察した。

4. ウクライナ語訳における女性語表現

4-1 身分を表す名詞

題名の『サド侯爵夫人』をドゥビンスキーは *Маркіза де Сад (Markiza de Sad)* とし、侯爵 *markiz* の女性形 *markiza* を採用しているが、ダンチェンコは *Жінка маркіза де Сад (Zhinka markiza de Sad)* とし、侯爵の妻 *zhinka markiza* を題名に採用している。ウクライナ語では通常ドゥビンスキーが採用した公爵夫人 *markiza* を使うことが一般的であるが、ダンチェンコはあえて妻 *zhinka* を使っ

ている。この zhinka には妻のほか女という意味があり、むしろこの意味合いのほうが正式であると言える。また妻を表す語には他に druzhyna があるが、この語には中世の諸侯に仕える騎士団という意味もあり、混乱を避けるために zhinka にした可能性もある。ダンチェンコはあえて zhinka という語を使うことで「侯爵」という爵位を越えたサドというスキャンダラスな男の「妻」さらには「女」の物語であるということを読者に暗に提示している。

4-2 指小形による女性語表現

ウクライナ語にはロシア語同様に指小形とよばれる「小ささ」「かわいらしさ」「やわらかさ」を表現する用法がある。子どもに対して話しかけるときの男性でも使用は可能ではあるが、一般に女性的な表現と言える。関西方言で「お日さん」「お豆さん」「あめちゃん」などと言うのと共通する用法といえるかもしれない。

「サン・フォン (,,,) 逆さに眺めた遠眼鏡は、家のまわりのきれいな芝生や花を、なおのこと小さく見せるだけ。 (,,,) いずれ大きくなったら、芝をひろげ、花をふやし、,,) (三島 1979:24) гарненький моріжок на галявці біля дому, любі квіточки (harnenkyi morizhok na haliavtsi bilia domu, liubi kvitochky) (Micima2006: 9);

зеленою травичкою і крихітними квіточками (zelenoiu travychkoiu i krykhitnymy kvitochkamy) (Micima2006: 204) [注2\)](#)

三島の原版では「きれいな芝生」や「花」を特に女性語として扱っていないが、ウクライナの翻訳者たちは指小形を使ってサン・フォン伯爵夫人が少女時代を語る口調を女らしく表現している。

4-3 懇願の表現

サド公爵夫人ルネのことと世間体を気にした母のモントルイユ夫人の意向を酌んで、知人のシミアヌ男爵夫人は、枢機卿にサド侯爵の釈放を願い出ることを約束する。

「シミアヌ どうぞお気をたしかに。お心強くあそばして。あなたが信心深い私にお望みのことはわかっておりますわ。折りよくパリに御逗留中のフィリップ枢機卿を、明日にでも早速お訪ねして、法王庁へ御赦免の沙汰をお願い出るようお願いするね。」(三島 1979:26)

утіштеся (utichtesia) (Micima2006: 9); Не втрачайте надію (Ne vtrachajte nadiiu) (Micima2006: 206) здогадуюся (zdohaduiusia) (Micima2006: 9); Я розумію (Ya rozumiiu) (Micima2006: 206)

この場面では、「お心強くあそばして」の動詞「—あそばす」や「わかっておりますわ」「よろしいのね」の終助詞の「—わ」「—のね」はウクライナ語の女性語表現には反映されていない。

「御赦免の沙汰をお願い出るようお願いするね」という台詞は、シミアヌ男爵夫人は、自分自身や近親者のことではなく知人の頼みごとを伝える立場であるので、通常では prosiaty 「頼む」と訳しても十分であろう。しかしウクライナ語訳では pomylyvaty, blahaty など「懇願する、すがる、請う」といった意味合いの語彙を使って訳している。

передати... прохання помилувати маркіза (peredaty... prokhannia pomylyvaty markiza) (Micima2001: 9); благатиму його звернутися (blahatymu ioho zvernutysia) (Micima2006: 206)

また日本語原版の「お裾に縫っても、お願いしたいと存じておりました」(三島 1979:27) も女装文体としての女らしさを強く表現した台詞であるが、ドゥビンスキーは Уклінно благаю про допомогу (Uklinno blahaiu pro dopdmohu) (Micima2001: 10) とし uklinno 「ひざまづいて」を加え blahaiu

「懇願します」をさらに補強し、ダンチェンコは Я ладна була впасти до ваших ніг, благаючи милості (Ya ladna bula vpascty do vashykh nih, blahaiuchy myloschi) (Micima2006: 206) とし、vpascty do vashykh

nih, 「足元にひれ伏し」 myloschi 「慈悲」を加え blahaiuchy 「懇願します」を強めている。

現在社会では必ずしも女性だから弱い立場を受け入れるという表現は妥当ではないかもしれないが、以上の例のように 1965 年当時の日本人男性である三島が女装文体によって書き上げた 18 世紀の女性像を、ウクライナの翻訳者たちは適切なウクライナ語の語句を選ぶことによって表現している。

4-4 比喩表現

男性と女性では物事をたとえる場合に同じようにたとえるとはかぎらない。事物からの連想は個人にもよって違うが性差もあるはずであり、女らしさをことさらに強調した女装文体ではそれも顕著なはずである。三島は、ばらばらになった記憶の比喩として「紅玉の頸飾り」という女性の装身具を使って表現している。

「ルネ 今まで記憶のなかにばらばらに散らばっていたものが、たちまちみごとにつながって、一連の頸飾りのようにになりました。紅玉の頸飾り。血のように真赤な宝石の。(、,) 記憶のあちこちに落ちちらばっていた紅玉の一粒一粒が、今俄かに一連の頸飾りになったのなら(、,) 記憶もとどかないふい昔に、私の頸飾りの糸が切れ、そのとき落ちちらばった紅玉を(、,)」(三島 1979:36)

ウクライナ語訳では、ドゥビンスキーは На коштовне намисто. Намисто з рубінів.(...) Якщо розсіяні в пам'яті рубіни раптово зібралися в намисто (Na koshtovne namysto. Namysto z rubiniv. (...) Yakshcho rozsiiani v pamiati rubini raptovo zibralsia v namysto) (Micima2001: 12) として、Na koshtovne namysto 「高価なネックレス」 Namysto z rubiniv 「ルビーの頸飾り」を使ってフランス貴族の豪華な女性像を表現している。一方、ダンチェンコは як коралі в намисті. У намисті з кораліями, червоними, наче кров... (...) розсіпані пурпурні намистинки ... (iак korali v namysti. U namysti z koraliiami, chervonymy, nache krov ... (...) rozsypani purpurni namystynky ...) (Micima2006: 213, 214) として、ウクライナ女性の民族衣装で使われる korali v namysti 「珊瑚の頸飾り」を使うことで、読者であるウクライナ人が持っている女性像と重ね合わせる技巧を取っている。また「赤い」という一般的な chervonyi という語彙だけではなく深紅色、濃紅色 purpurnyi という語を使うことで単調さを避けると同時に、詩的を深みを出している。

5. まとめ

身分を表す名詞表現では、翻訳の過程で許される範囲で、爵位を表した題名を妻あるいは女であることを強調させたと思われる題名とし、作品の捉え方と関わって興味深い訳出がなされている。また指小形や懇願の表現など翻訳者のウクライナ語における女性らしさを引き出す工夫がされていることがわかった。比喩ではオリジナル作品にほぼ忠実に訳出し女らしさを表現しながらも、ウクライナ人読者に向けた女性像を表現している。

また本研究では特に取り上げなかったが、動詞過去形女性語尾、形容詞女性形、定代名詞など文法規範で規定されるようなものに関しては計量的な分析を行なうなど、これからの研究がのぞまれる。さらに文体的な女性語表現では、本研究で見られた例以外にも文中での繰返し表現、未完了文などのあいまい表現など、女性表現の可能性がウクライナ語訳文でも現れる可能性があるだろう。

翻訳作品のさらなる分析によって日本語と外国語のジェンダー表現の用例を採取、整理分類することは外国語の女性語表現を研究することのみならず、今後の日本語や一般言語学のジェンダー研究に応用することが可能である。

注

1. 通常ウクライナ語はキリル文字を使うが、本稿では引用部分はキリル文字原文と括弧内に江川によるラテン文字転写表記を行なった。説明部分はラテン文字転写のみ、参考文献は検索の利便性を考慮しキリル文字表記のみとした。[\(本文に戻る\)](#)
2. 論点部分を示すため下線を加筆した。[\(本文に戻る\)](#)

参考文献

- 小原信利 (2002) ロシア語と日本語を対照して見るジェンダー観—職業を示す名詞の女性形、男性形と、動詞の「女性形」過去形を中心に—『日本語とジェンダー』第3号 https://gender.jp/journal/backnumber/no3_contents/ohara/
- 斎藤理香 (2011) 「女装文体」と近代前期の女性作家：樋口一葉の場合『日本語とジェンダー』第12号 https://gender.jp/journal/backnumber/no12_contents/saito/
- 佐々木瑞枝 (2000) 日本語ジェンダー学会設立趣旨—学際的探究と新しい学会運営システムを目指して—, https://gender.jp/journal/backnumber/no1_contents/preliminary_remark/
- 三島由紀夫 (1979) 『サド侯爵夫人・わが友ヒットラー』新潮社
- Misima Yu.* Жінка маркіза де Сад/ *Misima Yukiō* [пер. з япон. І.В. Данченко]. — Харків: Фоліо, 2006. — С. 187—286.
- Misima Yu.* Маркіза де Сад/ *Misima Yukiō* [пер. з япон. Ігор Дубінський]// Все світ. — 2001. — №1-2 (865-866). — С. 4—34

(江川裕之 えがわ ひろゆき タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学言語学院助教)

【研究ノート】

会話文末における「男ことば」と「女ことば」の分類： ジェンダー識別傾向とジェンダー特異性を指標として

有泉優里

要旨

本研究では、会話文末における「男ことば」と「女ことば」を、文末表現とジェンダーの関係性、及び、男性性・女性性の強さの2要素に基づいて7カテゴリに分類した。調査では、20代の学生15名を対象に、40種類の文末表現について、ジェンダー識別傾向（文末表現とジェンダーの関係性の指標）とジェンダー特異性（男性性・女性性の強さの指標）を測定した。初めに、ジェンダー識別傾向に基づいて、文末表現を「男性形式」、「女性形式」、「中性形式」に分類した後、ジェンダー特異性に応じて、「男性形式」や「女性形式」に分類された文末表現を「排他的形式」、「高特異形式」、「低特異形式」の3段階に分類した。その結果、分類カテゴリは「排他的男性形式」、「排他的女性形式」、「高特異男性形式」、「高特異女性形式」、「低特異男性形式」、「低特異女性形式」、及び「中性形式」となった。

キーワード

「男ことば」と「女ことば」、会話文末のジェンダー、ジェンダー識別傾向、ジェンダー特異性

1. 序論

1-1 研究の目的

日本語には「男ことば」と「女ことば」の区別があり、会話文末の「～だぜ」や「～わ」等はその代表例である（マグロイン花岡,1997；鈴木,1997）。しかし、この区別は文法によるものではなく、人々が「男性の言語」や「女性の言語」と漠然と認識しているだけに過ぎない。会話文末の「男ことば」や「女ことば」は、フィクションで登場人物の男性性や女性性を表現するためによく利用されるが、現実の使用傾向にはそれほど明確なジェンダー差はみられない。言葉遣いに関してジェンダー規範の影響があるものの（中村,2001；2008）、その場でどんな表現を用いるかは話者の選択次第であり、若い世代ほど言葉遣いが「中性化」しやすいともいわれる（小林,1993）。それでもなおフィクションで「男ことば」や「女ことば」が多用されるのは、実使用の有無に関わらず、人々の頭の中で「男性の言語」や「女性の言語」に関する知識が共有されているためだと考えられる。このことから、ことばのジェンダーを理解する一つ的手段として、人々の認識を基に文末表現を分類することが有用とみられる。そこで、文末表現とジェンダーに関する人々の認識を調査して、会話文末における「男ことば」と「女ことば」を分類することを本研究の目的とした。

「男ことば」と「女ことば」の捉え方は一つではなく、研究の目的や方向性に合わせた枠組みや分類法がある。例えば、中島（1999）では文末における疑問表現が「女性的」、「中立的」、「男性的」に分類され、因（2003）では漫画で用いられる文末表現が「女性語」、「女性的中立語」、「中立語」、「男性的中立語」、「男性語」の5種類に分類された。また、テレビで使用される「女ことば」を分類した高崎（1996）では、「女性専用」、「女性が多用」、「性に無関心」、「女性が普通あまり使わない」、「女性が殆ど使わない」の5段階を用いた。本稿で報告する調査は、会話文末のジェンダーに基づいた話者の印象形成に関する実証研究の一端として行われた^{注1)}。本稿では、その印象研

究(有泉,2007)に倣い、男性と関係がある(男性用と認識される)文末表現を「男性形式」、女性と関係がある(女性用と認識される)文末表現を「女性形式」と呼ぶことにした。

1-2 分類の指標

本研究では、文末表現の分類指標として「文末表現とジェンダーの関係性」と「男性性・女性性の強さ」の2要素に着目する。「男ことば」や「女ことば」をジェンダー・ステレオタイプのようなものと考え、一方の性別がより使用していると人々に認識されている言語を広義の「男ことば」と「女ことば」とみることができる。ジェンダー・ステレオタイプとは、男性や女性が持っている画一的な特徴についての信念(思い込み)のことで、具体的には、一方の性別により当てはまると人々に信じられている心理的特性や行動傾向を指す(Williams & Best, 1982)。この定義に倣えば、文末表現が「男性形式」か「女性形式」に分類される必要最低条件は、その文末表現が(女性よりも)男性に関係すると認識されているか、(男性よりも)女性に関係すると認識されているかとなるだろう。よって、文末表現とジェンダーの関係性により、文末表現を「男性形式」、「女性形式」、または、それ以外の中性的表現(以下、「中性形式」)に分類することにした。

しかし、上記の関係性指標は、文末表現がどのくらい男性的か女性的かというニュアンスを表しにくい。男性性・女性性が強いものから弱いものまでを段階的に分類するには不向きとみられる。そこで、個々の文末表現について男性性や女性性の強さを別に測定し、男性形式と女性形式の段階的な分類における指標とすることにした。一方で、男性性・女性性の強さの指標のみで文末表現を分類しようとした場合、「男性性の弱い男性形式」と「女性性の弱い女性形式」の違いや「中性形式」との僅かな差異が不明確になる恐れがある^{注2)}。故に、分類過程では文末表現とジェンダーの関係性指標を優先させる必要があるだろう。

調査では、文末表現とジェンダーの関係性は「ジェンダー識別傾向」、文末表現の男性性・女性性の強さは「ジェンダー特異性」を測定の指標とする。「ジェンダー識別傾向」は、文末表現が男性用または女性用に識別されやすい程度を表す。ある文末表現が男性用と識別されやすいほど男性と関係していることを示し、女性用と識別されやすいほど女性と関係していることを示すといえる。「ジェンダー特異性」は、文末表現が男性性または女性性と結びつく程度を表す。調査では、個々の文末表現が男性と女性のどちらにどのくらい偏って使用されるかを回答者に尋ね、この変数を測定する。ジェンダー規範により、男性は男らしく、女性は女らしく振る舞うことが奨励され、それに反する行為は規制される社会的傾向がある。故に、人々の認識の中で、男性による使用に偏っている文末表現ほど男性性とより結びついており、女性による使用に偏っている文末表現ほど女性性とより結びついていると考えられる。

1-3 分類カテゴリ

分類過程では、初めにジェンダー識別傾向の調査結果に基づいて、文末表現を「男性形式」、「女性形式」、「中性形式」に分類する。男性に関係すると認識された文末表現を「男性形式」、女性に関係すると認識された文末表現を「女性形式」に分類し、ジェンダーとの関係が確認されない文末表現を「中性形式」とする。次に、ジェンダー特異性の調査結果に基づいて、「男性形式」や「女性形式」に分類された文末表現を男性性・女性性の強い方から「排他的形式」、「高特異形式」、「低特異形式」の3段階に分類する。この結果、分類カテゴリは「排他的男性形式」、「排他的女性形式」、「高特異男性形式」、「高特異女性形式」、「低特異男性形式」、「低特異女性形式」、及び「中性形式」の7種類となる。

男性形式と女性形式の段階的な分類において、「排他的形式」は、ジェンダーに反した使用（男性による女性形式の使用、女性による男性形式の使用）が普通の状況では考えられないほど、男性性や女性性が極めて強い文末表現を指す。一方、「高特異形式」と「低特異形式」はジェンダーに反した使用の可能性が多少はあると認識されるもので、「排他的形式」に比べて男性性や女性性が穏やかな文末表現である。このうち、「高特異形式」は男性性や女性性が比較的強く、ジェンダーに沿った使用（男性による男性形式の使用、女性による女性形式の使用）が多いと考えられている文末表現である。「低特異形式」は男性性や女性性が比較的弱く、話者の性別にあまり関わりなく使用されると考えられている文末表現である。

2. 調査方法

2-1 回答者

調査は、東京都内の大学に通う大学生と大学院生の 15 名（男性 7 名、女性 8 名）を対象として 2005 年 4 月に実施された。回答者は全員 20 代で、日本語を母語としていることを回答前に口頭で確認した^{注3)}。

2-2 調査票

調査票は、設問文、及び、会話文と回答欄からなる回答項目によって構成された。設問文では、会話文中の文末表現が男性用と女性用のどちらだと思いか（ジェンダー識別傾向）、また、その文末表現が一方の性別にどのくらい偏って使用されていると思いか（ジェンダー特異性）について回答を求めた。両項目について判断できない場合は空欄にするようにも明記した。図 1 に設問文と回答項目の例を示した。

会話文は、同じ文末表現を含む 2 種類を 1 組とし、判断対象の文末表現を下線で示した。会話文を 2 つ 1 組で提示したのは、複数の事例を挙げてジェンダーに関する判断を容易にするため、また、特定の会話内容が回答に影響するのをできるだけ防ぐためであった。会話文の直ぐ下にジェンダー識別傾向の回答欄（「男性」か「女性」を強制選択）を設け、その横にジェンダー特異性の回答に用いる 4 点尺度（1＝「男性だけが使う」、2＝「男性のほうが多い」、3＝「女性のほうが多い」、4＝「女性だけが使う」）を配した。調査票の最後に、回答者の性別と所属（学部・研究科）を尋ねる項目を設けた。

下線部の言葉遣いは、男性と女性のどちらが使用するものだと思いますか。「男性」か「女性」を選んでください。その言葉遣いは、一般的に男性と女性のどちらにどのくらい使用されていると思いますか。以下の 4 段階から回答を選んで、番号に○をつけてください。

※できるだけ全ての質問に答えてください（どうしても分からない場合は空欄）。

	男性だけ が使う	男性のほう が多い	女性のほう が多い	女性だけ が使う
1 「明日の 1 時 <u>だ</u> な。」「今日は雨 <u>だ</u> な。」 □ 男性 □ 女性	1 —————	2 —————	3 —————	4
2 「...も、その本買った <u>の</u> 。」「...に行ってきた <u>の</u> 。」 □ 男性 □ 女性	1 —————	2 —————	3 —————	4

図 1 設問文と回答項目の例

調査対象の文末表現は 40 種類であった。調査対象にはジェンダーに関わると考えられる文末表現の他に、関係が薄いとみられるものも含めた。会話文の作成時には、日本語の文法書 (Makino & Tsutsui, 1986; 益岡・田窪, 1989) や社会言語学の先行研究 (マグローイン花岡, 1997; 鈴木, 1997) で例示された文末表現を参考にした。提示した全会話文を付録 A に示した。

ジェンダー識別傾向の測定方法は、Williams と Best (1982) のジェンダー・ステレオタイプ調査を参考にした。その調査では、200 の特性形容詞を男性か女性のどちらにあてはまるかを尋ね、その回答比率をジェンダー・ステレオタイプの指標とした (Williams & Best, 1981)。この例に倣い、本調査では多種の文末表現について男性か女性のどちらが用いるものかを強制的に選択させ、その回答数を検討した。調査対象に中性的表現が含まれていても回答選択肢に「中性」等を設けなかったのはこのためである。判別が付きにくい状況でも敢えて「男性」か「女性」を選択させ、いずれかに回答が偏れば、その文末表現は (人々が明確に意識していなくても) 男性または女性に関係しているといえる。この他、尺度の midpoint (例えば 5 点尺度では「3」) や「どちらでもない」等の中立的な選択肢に回答が集中する一般的傾向を踏まえ、ジェンダー特異性項目には midpoint を設けない 4 点尺度を採用した。

2-3 手続き

各回答者に調査票を一部ずつ配布した。調査者が口頭で「深く考えずに、第一印象で答えてください」と伝えた後、回答者は調査票への回答を始めた。

3. 調査結果

3-1 集計

各文末表現のジェンダー識別傾向について、「男性」と「女性」の回答数を集計した。各文末表現のジェンダー特異性については、「男性だけが使う (以下、男性だけ)」、「男性のほうが多い」、「女性のほうが多い」、「女性だけが使う (以下、女性だけ)」の回答数を集計した他、尺度平均点を算出した。この尺度平均点を「ジェンダー特異性得点」と名付けた。この得点は 2.5 を midpoint とし、数値がより低いほど「男性に偏って使用される」と判断される傾向が強く、より高いほど「女性に偏って使用される」と判断される傾向が強いことを示した。以上の結果を表 1 (男性形式)、表 2 (女性形式)、表 3 (中性形式) に示した。

表 1 「男性形式」に分類された文末表現

文末表現	直前の語形	ジェンダー識別傾向		ジェンダー特異性				得点
		男性用	女性用	男性だけ	男性のほうが多い	女性のほうが多い	女性だけ	
だぜ	名詞	15	0	12	3	0	0	1.20
だろ	名詞	15	0	8	7	0	0	1.47
だろ	動詞連体形	15	0	7	8	0	0	1.53
んだろ	動詞連体形	15	0	7	8	0	0	1.53
んだぜ	動詞連体形	15	0	7	8	0	0	1.53
ぞ	動詞連体形	15	0	6	9	0	0	1.60
よな	動詞連体形	15	0	6	9	0	0	1.60
だい	動連(疑問)	15	0	6	8	1	0	1.67
かい	名詞(疑問)	15	0	5	8	2	0	1.80
だ	名詞	15	0	3	9	3	0	2.00
だな	名詞	15	0	2	9	4	0	2.13
のか	動連(疑問)	15	0	1	8	6	0	2.33

んだ	動詞連体形	15	0	1	7	7	0	2.40
だろう	動連/名詞	15	0	0	9	6	0	2.40
な	動詞連体形	13	2	0	7	8	0	2.40
んだ	形容詞連体形	14	1	0	8	7	0	2.47
だよ	名詞	14	1	0	8	7	0	2.47
だろうな	動詞連体形	15	0	0	7	8	0	2.53

表2 「女性形式」に分類された文末表現

文末表現	直前の語形	ジェンダー識別傾向		ジェンダー特異性				得点
		男性用	女性用	男性だけ	男性のほうが多い	女性のほうが多い	女性だけ	
わよ	動詞連体形	0	15	0	0	2	13	3.87
わ	動詞連体形	0	15	0	0	4	11	3.73
なの	名詞	0	15	0	0	5	10	3.67
かしら	動詞連体形	0	15	0	0	5	10	3.66
ね	名詞	0	15	0	0	6	9	3.60
よ	名詞	0	15	0	0	7	8	3.53
よね	名詞	0	15	0	0	7	8	3.53
のね	動詞連体	0	15	0	0	7	8	3.53
なのよ	形容詞連体	0	15	0	0	8	7	3.47
のよ	動詞連体形	0	15	0	0	9	6	3.40
ね	動詞連体形	0	15	0	3	8	3	3.00
でしょうね	名詞	0	15	0	3	9	2	2.93
んでしょ	動詞連体形	0	15	0	6	8	1	2.67
(ん)だもん	動連/名詞	0	15	0	6	8	1	2.67
でしょう	動詞連体形	0	15	0	6	9	0	2.60
の	動連(疑問)	0	15	0	6	9	0	2.60
の	動詞連体形	0	15	0	7	8	0	2.47
でしょ	動詞連体形	0	15	0	8	7	0	2.47

ジェンダー特異性について一部の文末表現に未回答があった（「ね（動詞連体形）」1、「でしょうね（名詞）」1）。

表3 「中性形式」に分類された文末表現

文末表現	直前の語形	ジェンダー識別傾向		ジェンダー特異性				得点
		男性用	女性用	男性だけ	男性のほうが多い	女性のほうが多い	女性だけ	
わけ	動詞連体形	5	6	0	6	9	0	2.60
かな	名詞	6	7	0	7	8	0	2.53
から	動詞連体形	7	6	0	8	7	0	2.47
よ	動詞連体形	5	9	1	7	7	0	2.40

ジェンダー特異性について一部の文末表現に未回答があった（「わけ（動詞連体形）」4、「かな（名詞）」2、「から（動詞連体形）」2、「よ（動詞連体形）」1）。

3-2 ジェンダー識別傾向に基づいた分類

ジェンダー識別傾向の結果によると、18語の文末表現について大半の回答者あるいは全員が男性用と判断しており（表1）、別の18語については回答者全員が女性用と判断したため（表2）、それぞれを「男性形式」と「女性形式」に分類した。一方、残りの4語については、識別傾向に偏りが殆どみられないか未回答が多くあったため、これらを「中性形式」に分類した（表3）。

3-3 男性形式・女性形式の段階的分類

ジェンダー特異性の結果を概観すると、「男性形式」に分類された文末表現は、「男性だけ」または「男性のほうが多い」の回答が多いが、一部の文末表現については「女性のほうが多い」という回答もあったことが分かった（表 1）。また、「女性形式」に分類された文末表現についても、「女性だけ」または「女性のほうが多い」の回答が多いが、一部の文末表現については「男性のほうが多い」という回答もあった（表 2）。一方、「男性形式」とされた文末表現を「女性だけ」と回答した回答者、または、「女性形式」とされた文末表現を「男性だけ」と回答した回答者は一人もいなかった。

以上の結果を踏まえて、「男性形式」に分類された文末表現 18 語のうち、「男性だけ」の回答が特に多かった（回答者の 3 分の 2 を超えた）1 語を「排他的男性形式」に分類した。次に、「男性だけ」の回答と「男性のほうが多い」の回答が散らばっていた 8 語を「高特異男性形式」に分類した。残りの、「男性だけ」の回答が比較的少ないか全く無く、「男性のほうが多い」の他にも「女性のほうが多い」の回答も多少あった 9 語を「低特異男性形式」に分類した。

上記と同様の基準で、「女性形式」に分類された文末表現の段階的分類を行った。「女性だけ」の回答が特に多かった（回答者の 3 分の 2 を超えた）2 語を「排他的女性形式」に、「女性だけ」の回答と「女性のほうが多い」の回答が散らばっていた 8 語を「高特異女性形式」に分類した。「女性だけ」の回答が比較的少ないか全く無く、「女性のほうが多い」の他にも「男性のほうが多い」の回答も多少あった 8 語を「低特異女性形式」に分類した。以上の分類結果と各カテゴリのジェンダー特異性得点の分布を表 4 に示した。

表 4 文末表現の分類

分類カテゴリ	文末表現（直前の語形）	ジェンダー特異性得点分布
排他的男性形式	だぜ（名詞）	1.20
高特異男性形式	だろ（名詞）、だろ（動詞連体形）、んだろ（動詞連体形）、んだぜ（動詞連体形）、ぞ（形容詞）、だい（名詞：疑問形）、かい（名詞：疑問形）、よな（動詞連体形）	1.47 以上、1.80 以下
低特異男性形式	だ（名詞）、んだ（動詞連体形）、んだ（形容詞連体形）、んだよ（動詞連体形）、だな（名詞）、だよ（名詞）、（の）か（動詞連体形：疑問形）、な（動詞連体形）、だろう（動詞連体形）	2.00 以上、2.53 以下
排他的女性形式	わ（動詞連体形）、わよ（動詞連体形）	3.73 以上
高特異女性形式	なの（名詞）、ね（名詞）、よ（名詞）、かしら（動詞連体形）、よね（名詞）、のね（動詞連体形）、のよ（動詞連体形）、なのよ（形容詞連体形）	3.40 以上、3.67 以下
低特異女性形式	ね（動詞連体形）、でしょうね（名詞）、でしょ（動詞連体形）、んでしょ（動詞連体形）、でしょう（動詞連体形）、の（動詞連体形）、の（動詞連体形：疑問形）、んだもん（動詞連体形）	2.47 以上、3.00 以下
中性形式	かな（名詞）、から（動詞連体形）、わけ（動詞連体形）、よ（動詞連体形）	2.40 以上、2.60 以下

ジェンダー特異性得点の分布では（表 4）、「男性形式」に分類された文末表現のうち「排他的男性形式」、「高特異男性形式」、及び、「低特異男性形式」の間で数値の重複はみられなかった。同様に、「女性形式」に分類された文末表現のうち「排他的女性形式」、「高特異女性形式」、及び、

「低特異女性形式」の間についても数値の重複はなかった。このことから、表4に示した分類結果が、男性形式と男性性との結びつきの強さ、及び、女性形式と女性性との結びつきの強さを段階的に表していることが示唆された。

一方、「低特異男性形式」と「低特異女性形式」に分類された文末表現の一部にはジェンダー特異性得点の重複がみられた。また、これらには「中性形式」に分類された文末表現ともジェンダー特異性得点が重複したものもあった。ジェンダー特異性に基づけば、「低特異男性形式」に分類された文末表現の一部は際立って男性的といえず、「低特異女性形式」に分類された文末表現も際立って女性的とはいえない。しかし、ジェンダー識別傾向によると、「低特異男性形式」に分類された文末表現は男性用と識別される傾向があり、「低特異女性形式」に分類された文末表現は女性用と識別される傾向があった。よって、これらの文末表現は、ジェンダー特異性得点が低くても、ジェンダーと関係のない「中性形式」とは違い、男性または女性と関係があると認識されていることが示唆された。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、文末表現をジェンダーに基づいて分類する際に、ジェンダー識別傾向（文末表現とジェンダーの関係性の指標）とジェンダー特異性（男性性・女性性の強さの指標）の2つを分類指標とする必要性を論じ、調査を実施した。しかし、本稿で報告した調査は、印象形成に関する実証研究の一端として行われたため、調査結果を標準的な「男ことば」と「女ことば」の分類として一般化するには限界がある。本研究における分類カテゴリ間の境界は、母体の印象研究の都合に合わせたもので、調査回答者は15名と少ないうえ属性も偏っていた。また、実施地域は東京都に限られていたが、研究対象の「男ことば」や「女ことば」は共通語（標準語）であるため、関東圏以外の人々にとって言語感覚が異なる可能性があるだろう。さらに、ことばに関する感覚は刻一刻と変化しているため、調査結果も実施時期から時間が過ぎてしまえば古い傾向を示しているだけに過ぎない。以上を踏まえ、どの文末表現がどのカテゴリに分類されたか等については、限られた条件下で得られた結果とみなすべきであろう。

調査票についても多くの問題点があり、今後は改善していく必要がある。まず、回答欄の配置が偏った回答を導いた可能性は見逃せない。ジェンダー識別傾向の回答欄とジェンダー特異性の回答欄が並列に配置されたため（図1）、回答者が2つの回答を意識的に合わせることができる状態であった（例：ジェンダー特異性で「女性のほうが多い」を選んだので、ジェンダー識別傾向でも「女性」を選ぶ）。その結果、未回答が減り、「男性」や「女性」の回答に偏った結果を生じさせた可能性は否定できない。回答者の素直な考えを引き出すためには、2変数を別々の項目として異なるページに配する等の工夫が必要だとみられる。さらに、半数の回答者は先にジェンダー識別を行った後でジェンダー特異性を判断し、もう半分の回答者は先にジェンダー特異性を判断した後でジェンダー識別を行うことで、回答順序による影響を相殺する必要もあるだろう（カウンターバランス）。また、文末表現の提示順序が特定の回答を導いた可能性もあるため、半数の調査票で提示順序を逆にする等の工夫も必要だろう。この他、一つの文末表現につき会話文が2種類提示されたが、特定の会話内容が回答に影響を及ぼした可能性が消えたわけではない。事前に会話内容がジェンダーと無関係であることを確認し、何種類提示することが妥当かを再検討することが課題である。

注

1. 本稿で報告した分類結果は、印象研究において実験材料となる会話文の作成時に利用された。

有泉（2007）では、男性形式の使用は横暴性に関わる男性的印象を与え、女性形式の使用は消極性、感受性に関わる女性的印象を与える効果があることが示された（文末形式のジェンダー効果）。また、ジェンダーに反した文末表現の使用は、ジェンダーに沿った文末表現の使用よりも、男性形式や女性形式に基づいた印象を強める傾向があることも分かった（文末形式のクロス・ジェンダー効果）。上記の印象効果を検討するために、排他的男性形式と排他的女性形式は会話文から除外された。（[本文に戻る](#)）

2. 「男性性の弱い男性形式」、「女性性の弱い女性形式」、及び、中性的表現はジェンダーの弱さという点で殆ど差はないが、話者の印象形成過程における影響を考えると別のカテゴリとみる必要がある。会話のやり取りでは、複数の文末表現が数度に渡り使用されるのが一般的であるため、男性性・女性性が弱いものでも、男性形式や女性形式の使用は話者の印象に影響するとみられる。例えば、女性性が弱い女性形式でも繰り返し使用すれば、話者の女性性が表現される可能性は高いが、中性的表現を繰り返し使用しても話者の男性性・女性性は表現されにくい。（[本文に戻る](#)）
3. 本研究の母体である印象研究で、東京都かその近郊在住の20代の学生が実験参加者であったため、この分類調査の回答者にも似た属性を持つ人が選ばれた。（[本文に戻る](#)）

付記

本稿は、博士論文「文末形式のジェンダーに基づいた話者の印象形成に関する実証的研究」の一部の調査データを、単独の論考として書き直したものである。

謝辞

本稿で報告した分類調査を博士論文にまとめる際に、東京大学の山口勸先生、池田謙一先生、唐沢かおり先生、東京学芸大学の相川充先生、東洋大学の北村英哉先生より多くの貴重なご指導を頂きました。心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 有泉優里（2007）文末形式のジェンダーが話者の印象に及ぼす影響『社会言語科学』 9(2), 3-16.
- 因 京子（2003）マンガに見るジェンダー表現の機能『日本語とジェンダー』 3
[\(https://gender.jp/journal/backnumber/no3_contents/chinami/\)](https://gender.jp/journal/backnumber/no3_contents/chinami/)
- 小林恵美子（1993）世代と女性語-若い世代のことばの「中性化」について『日本語学』 12(5), 181-192.
- マグローイン花岡直美（1997）終助詞 井出祥子（編）『女性語の世界』明治書院 33-41.
- MAKINO, Seiichi & TSUTSUI, Michio（1986）*A dictionary of basic Japanese grammar*. Tokyo: The Japan Times.
- 益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版
- 中村桃子（2001）『ことばとジェンダー』頸草書房
- 中村桃子（2008）『＜性＞と日本語』日本放送出版会
- 中島悦子（1999）疑問表現の様相 現代日本語研究会（編）『女性のことば：職業編』 ひつじ書房 59-82.
- 鈴木 睦（1997）女性語の本質：丁寧さ、発話行為の視点から 井出祥子（編）『女性語の世界』明治書院 59-73.
- 高崎みどり（1996）テレビと女性語『日本語学』 15(9), 46-56.

Williams, John E. & Best, Deborah L. (1982) *Measuring sex stereotypes: A thirty-nation study*. Beverly Hills: Sage Publications.

付録 A : 会話文 (調査票で提示した順序)

- 1 「明日の1時だな。」「今日は雨だな。」
- 2 「...も、その本買ったの。」「...に行ってきたの。」
- 3 「結構よかったな。」「期待した以上だったな。」
- 4 「今日提出しなくてもいいわけ？」「日曜にも開いてるわけ？」
- 5 「...なら行ったことあるわ。」「明日までに仕上げるわ。」
- 6 「今日は休講だぜ。」「もうすぐ昼だぜ。」
- 7 「わかっているわよ。」「すぐ行くわよ。」
- 8 「もうすぐ締め切りだ。」「このままだと遅刻だ。」
- 9 「思い出したくないことなの。」「明日は雨なの。」
- 10 「この分だと明日は雨だろうな。」「今出ても遅刻だろうな。」
- 11 「おもしろいこと言うね。」「教えてあげるね。」
- 12 「ここ、おいしいんだよ。」「それ考えすぎだよ。」
- 13 「...は、混んでたかい？」「もう終わりかい？」
- 14 「また明日ね。」「面白い先生ね。」
- 15 「...に行ってきたのか？」「これでいいのか？」
- 16 「この分だと休講でしょうね。」「明日は雨でしょうね。」
- 17 「これ、おいしいぞ。」「今日は遅いぞ。」
- 18 「よくあるでしょ。」「...に、よく行くでしょ。」
- 19 「この分だと雨だろ。」「もうすぐ試験だろ。」
- 20 「どうしても無理よ。」「このままだと遅刻よ。」
- 21 「よく食べるな。」「結構たくさんいるな。」
- 22 「その本、取ってくれないかしら。」「これでいいかしら。」
- 23 「今日は持ってきたんだぜ。」「...は時間がかかるんだぜ。」
- 24 「今日来るの？」「そんなことありえるの？」
- 25 「多分間に合わないだろう。」「今度は大丈夫だろう。」
- 26 「今朝は早く来たのよ。」「もう、始まるのよ。」
- 27 「もう行くんだろ。」「いかなくていいんだろ。」
- 28 「いつも遅刻よね。」「これは今日提出よね。」
- 29 「今日提出するんだよ。」「...が来たんだよ。」
- 30 「やめることにしたのよ。」「今度旅行に行くのよ。」
- 31 「...に行くんだ。」「面白いんだ。」
- 32 「バイトがあるんだもん。」「だって夏だもん。」
- 33 「これ、おいしいんだ。」「明日は朝が早いんだ。」
- 34 「前に言ったでしょう。」「さっき食べたでしょう。」
- 35 「こんなでいいかな。」「今日は雨かな。」
- 36 「今度旅行に行くんでしょ。」「好きに答えていいんでしょ。」
- 37 「今日は早く終わるから。」「今度持ってくるから。」
- 38 「きっと雨でしょうね。」「強いて言えばこっちでしょうね。」

39 「もう帰るよ。」「今度、持ってくるよ。」

40 「今日はどれにするんだい？」「これでどうだい？」

(有泉優里 ありいずみ ゆかり 放送大学教養学部非常勤講師)

【日本語ジェンダー学会 14 回大会のお知らせ】

日本語ジェンダー学会 第十四回 年次大会

- 2013 年 7 月 6 日(土)10 時 30 分～17 時(10 時から受付)
- 場所 桜美林大学町田キャンパス
東京都町田市常盤町 3758 *JR 横浜線「淵野辺」駅より無料スクールバスで約 8 分
- 学会参加費 3,000 円(大学院生を含む)
10 時 50 分～
実行委員長挨拶 穂田 照子(桜美林大学教授)
11 時～12 時
- 基調講演 ポール・スノードン氏(杏林大学 副学長)
「ジェンダーの文法;文法のジェンダー」
The Grammar of Gender; the Gender of Grammar.
12 時～12 時 30 分 ジェンダー学会総会(司会)
- 12 時 30 分～13 時 30 分 昼休み
13 時 30 分～15 時
シンポジウム「翻訳から見たジェンダー表現の諸相」
日本の文学作品が英語に翻訳される際に日本語の「ジェンダー表現」の諸相が英訳でどのように加訳、意訳、減訳されているか、また英語の小説の日本語訳ではどうなっているのか、を見るものです。3 人のパネリストにはそれぞれ異なる作家をとりあげていただきました。どんな翻訳論が展開するのか楽しみです。
パネリスト
 ポール スノードン氏(杏林大学副学長)
 矢野安剛氏(早稲田大学名誉教授)>
 斎藤理香氏(Assistant Professor, Western Michigan University)
コーディネーター・司会
 佐々木瑞枝(武蔵野大学院名誉教授)
14 時 45 分～16 時 45 分
- 研究発表
16 時 50 分
- 閉会の挨拶
懇親会 17 時 30 分～19 時

日本語ジェンダー学会会則

第1条（名称）本会は、日本語ジェンダー学会（The Society for Gender Studies in Japanese）と称する。

第2条（目的）本会は、日本語におけるジェンダー表現を総合的に研究することを目的とする。

第3条（事業）本会は、上記の目的を達成するために次の事業を行う。

(1)年度ごとの大会（研究集会）、その他の研究会の開催

(2)機関誌『日本語とジェンダー』の刊行

(3)研究成果の公刊・公開

(4)その他、本会の目的を達成するのに必要な事業

第4条（会員・賛助会員）本会の会員は、上記の目的に賛同し、その研究を行なっている者とする。また、本会の研究目的に賛同し、支援する個人もしくは法人を賛助会員とする。

第5条（会費）会員は、総会ないし研究集会参加時に会費を納入するものとし、振込み等を行わない。

第6条（役員）本会は、会長1名と顧問若干名・理事若干名・評議員若干名・監査2名・幹事若干名をおく。

(1)会長は、理事の互選により選出され、会務を統括し、本会を代表する。

(2)顧問は、会長ないし理事の推薦をうけて理事会によって指名し、総会において決定する。

(3)理事は、理事会が会員の中から推薦する者と、会員の選挙によって選出される者を含む。

(4)評議員は、理事会が会員の中から推薦する者と、会員の選挙によって選出される者を含む。評議員は、理事の任務遂行の全般を補佐する。

(5)監査および幹事は、理事会の承認を経て、会長が委嘱する。監査は、年一回会計を監査し、幹事は大会・研究集会の運営等において理事を補佐する。

第7条（総会・理事会）本会に総会、理事会、評議員会をおく。

(1)総会は、会員をもって組織し、本会の最高の議決機関として本会の事業および運営に関する重要事項を審議決定する。総会は年一回、当該年度の大会のときに、また臨時総会は会長が必要と認める場合、随時開催する。

(2)理事会は、会長および顧問、理事をもって組織し、第3条に定める事業および本会の予算・決算に責任をもち、会務執行の任に当たる。理事会の開催は、会長が招集する。

(3)評議員会は、年次総会の前に開催する。

第8条（事務局）本会は、事務局を群馬大学留学生センター石田研究室におく。

第9条（会則の改正）本会則は、総会出席者の三分の二以上の同意を得て、改正することができる。

付則 この会則は2001年3月18日の日本語ジェンダー学会の設立総会において制定し、その日より発効する。

日本語ジェンダー学会役員名簿

(※印は、2013 年に昇任ないし新規就任)

【本部：日本】

(※印は、2013 年に昇任ないし新規就任)

名誉会長	佐々木瑞枝 (武蔵野大学名誉教授)
顧問	國廣哲彌 (東京大学名誉教授) 山田卓生 (横浜国立大学名誉教授)※
会長	HIDASÍ Judit (ヒダシ・ユディット; ブダペスト商科大学教授) ※
副会長	日置弘一郎 (京都大学教授) 斎藤理香 (Assistant Professor, Western Michigan University) 渡部孝子 (群馬大学准教授) ※
理事 (50 音順)	穂田照子 (桜美林大学准教授) 蝦名毅 (JX 日鉱日石金属株式会社) 河野憲嗣 (京都大学博士; 経済学) ※ 因京子 (日本赤十字九州国際看護大学教授) 前田直子 (学習院大学教授) 水本光美 (北九州市立大学教授) 矢野安剛 (早稲田大学名誉教授) ※
評議員 (50 音順)	宇佐美まゆみ (東京外国語大学大学院教授) 王鉄橋 (洛陽外国語学院日本学研究センター教授) 大島弥生 (東京海洋大学准教授) 岡本能里子 (東京国際大学教授) 小川早百合 (聖心女子大学教授) 笠原仁子 (編集者) 門倉正美 (横浜国立大学名誉教授) 佐藤勢紀子 (東北大学高等教育開発推進センター教授) 示村陽一 (武蔵野大学教授) 曹大峰 (北京外国語大学教授) 高木香世子 (マドリッドアウトノマ大学助教授) 立松喜久子 (前米加大学連合副所長) トムソン木下千尋 (ニューサウスウェールズ大学教授) 中村桃子 (関東学院大学教授) 原田邦博 (NHK 考査室主管) 朴 正一 (釜山外国語大学教授) 松井幸子 (三重大学名誉教授) 松沢明広 (朝日新聞東京本社・校閲センター) 三木千恵 山崎佳子 (東京大学特任専門員) レイノルズ・秋葉かつえ (ハワイ大学教授)
事務局	
事務局長	穂田照子 (桜美林大学准教授)

- メール担当 三木千恵
財務 河野憲嗣 (京都大学博士; 経済学)
広報 蝦名毅
学会誌編集
委員長 因京子 (日本赤十字九州国際看護大学)
副委員長 斎藤理香 (Western Michigan University)
渡部孝子 (群馬大学)
編集委員 門倉正美 (元横浜国立大学)
小川早百合 (聖心女子大学)
日置弘一郎 (京都大学)
監査 松谷葉子 (相愛大学音楽学部音楽マネジメント学科准教授)
- 【支部：海外】
- 中国支部長： 曹 大峰 (北京外国語大学教授)
 - 韓国支部長： 朴 正一 (釜山外国語大学教授)
 - 東ヨーロッパ支部長： HIDASI Judit (ブダペスト商科大学教授)
 - 西ヨーロッパ支部長： 高木香世子 (マドリッドアウトノマ大学助教授)
 - オーストラリア支部長： トムソン木下千尋 (ニューサウスウェールズ大学教授)

日本語ジェンダー学会入会申込書

日本語ジェンダー学会」に入会を申し込みます。

日付_____年_____月_____日

氏名 (ふりがな) _____ ()

性別 F M 生年月日 (もし良ければ) _____

住所 _____

電話 _____

e メールアドレス _____

所属 _____

(日本学術会議会員規定に従い、以下の所属に○をおつけ下さい)

A 会員 大学教授 助教授 講師 非常勤講師 大学院生 研究所員

B 会員 日本語学校教師 会社員 学校教諭 その他

なお、AB 両方に所属される先生は A の方にお書きください。

この領域での主な業績 _____

日本語教育経験 (年数・教育形態・対象学習者の種類等について自由にお書き下さい)

本会への要望・期待(自由にお書き下さい)

- * 本申込書は、メールで三木千恵 (admission@gender.jp)
宛にお送りください。メールアドレスをお持ちでない方は郵便で以下にお送り下さい。
〒194-0294 東京都町田市常磐町 3758 番地 桜美林大学
リベラルアーツ学群(コミュニケーション学) 穂田(あきた) 照子研究室内
日本語ジェンダー学会

Regulations of the Society for Gender Studies in Japanese

Article 1. Name

This society shall be known as The Society for Gender Studies in Japanese.

Article 2. Objective

This Society shall research all aspects of gender-related expression in the Japanese language.

Article 3. Activities

In order to fulfil its stated objective, the Society shall:

- Convene an annual conference and other study groups.
- Publish the bulletin “Japanese and Gender”.
- Release the results of its research.
- Conduct other activities that contribute to its purpose.

Article 4. Members and Auxiliary Members

Membership of this Society shall consist of those who support its objectives and who are engaged in related research. Individuals or corporations who support the Society’s research objectives may be admitted as auxiliary members.

Article 5. Membership Fees

Membership fees shall be payable at the annual conference or at study groups. Payment by bank transfer shall not be accepted.

Article 6. Board

The Society’s Board shall consist of one President and a number of advisors, directors, trustees, auditors and secretaries.

- 1) The President shall be elected by mutual vote of the directors, and shall preside over the business of the Society and act as its representative.
 - 2) The advisors shall be nominated by the Board of Directors after recommendation by the President and directors, and shall be confirmed by the general assembly.
 - 3) The directors shall include both those recommended from the membership of the board of directors and those elected by the general members.
 - 4) The trustees shall include both those recommended from the membership of the board of directors and those elected by the general members. The trustees shall assist in all aspects of the President’s duties.
- The President, with the approval of the directors, shall appoint the auditors and secretaries. The auditors shall conduct an annual financial audit of the Society. The secretaries shall assist the directors with the organization and running of the annual conference and study groups.

Article 7. General Assembly and Board of Directors

The Society shall consist of a General Assembly, a Board of Directors and a Board of Trustees.

- 1) The General Assembly shall be comprised of the Society's members, and will be the highest decision making body regarding matters of the Society's activities and management. The General Assembly shall be convened once a year during the annual conference, and at any other time the President deems it necessary.
- 2) The Board of Directors shall be comprised of the President, advisors and directors, and shall be responsible for the activities outlined in Article 3, as well as the Society's budgeting and financial administration. The President shall convene the Board of Directors.
- 3) The Board of Trustees shall be convened before the annual conference.

Article 8. Office

The Society shall establish an office in the Ishida Research Office at the International Student Center of Gunma University.

Article 9. Amendment of Regulations

These regulations may be amended with the consent of a two thirds majority of those attending the annual conference.

By-Law. These regulations shall be published at the inaugural meeting of The Society for Gender Studies in Japanese on March 18, 2001, and shall be effective from that date.

Officers of The Society for Gender Studies in Japanese

Honorary President

SASAKI Mizue (Professor, Musasino University)

President

HIDASI Judit (Dean, Budapest Business School)

vice-President

HIOKI Koichiro (Professor, Kyoto University)

SAITO Rika (Assistant Professor of Japanese, Western Michigan University)

WATANAB Takako (Associate Professor, Gunma University)

Advisors

KUNIHIO Tetsuya (Professor Emeritus, Tokyo University)

YAMADA Takuo (Professor Emeritus, Yokohama National University)

Directors

AKITA Teruko (Associate Professor, Ohbirin University)

CHINAMI Kyoko (Professor, The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing)

EBINA Tsuyoshi (JX Nippon Mining & Metals Corporation)

KADOKURA Masami (Professor, Yokohama National University)

KAWANO Kenji (Financial Administration)

MAEDA Naoko (Professor, Gakushuin University)

MIZUMOTO Terumi (Professor, Kitakyushu University)

YANO Yasukata (Professor Emeritus, Waseda University)

Trustees

CAO Dafeng (Professor, Beijing Foreign Studies University)

GILSON Julie (Lecturer, Birmingham University, UK)

HARADA Kunihiro (NHK Senior officer program inspection)

KASAHARA Kimiko (Editor, Poplar Communications. Co.Ltd.)

MATSUI Sachiko (Professor Emeritus, Mie University)

MATSUZAWA Akihiro (Asahi Newspaper Co.)

NAKAMURA Momoko (Professor, Kanto Gakuin University)

OGAWA Sayuri (Professor, University of The Sacred Heart Tokyo)

OKAMOTO Noriko (Professor, Tokyo International University)

OSHIMA Yayoi (Associate Professor, Tokyo University of Marine Science and Technology)

PARK Jungil (Professor, Pusan University of Foreign Studies)

REYNOLDS Katsue A. (Professor, University of Hawaii at Manoa)

SATO Sekiko (Professor, Center for the Advancement of Higher Education, Tohoku University)

SHIMEMURA Yoichi (Professor, Musasino University)

TAKAGI Kayoko (Professor, Universidad Autonoma de Madrid)

TOMPSON Kinoshita Chihiro (Professor, University of New South Wales)

TATEMATSU Kikuko (Former Assistant Director, Inter-University Center)

USAMI Mayumi (Professor, Tokyo University of Foreign Studies)

YAMAZAKI Keiko (Lecturer, Tokyo University)

WANG Tie Qiao ((Professor, PLA University of Foreign Languages)

Secretaries

AKITA Teruko (Chief Secretary)

MIKI Chie (Mail and Office Administration)

KAWANO Kenji (Financial Administration)

Public relations

EBINA Tsuyoshi (JX Nippon Mining & Metals Corporation)

Inspector

MATSUTANI Yoko

Editors of the Bulletins

Chief Editor CHINAMI Kyoko

Editors SAITO Rika, WATABE Takako

Examiners HIOKI Koichiro, KADOKURA Masami, OGAWA Sayuri,
YAMAZAKI Yoshiko

Advisor SASAKI Mizue

(As of July of 2013)

Application for Membership
The Society for Gender Studies in Japanese

I wish to apply for membership of The Society for Gender Studies in Japanese.

Date _____,

Name _____

Gender M/F DOB (optional) _____

Address _____

Phone _____

Email _____

Affiliation _____

Major achievements in this field

Japanese language education experience
(Include number of years, type of institution, type of students, etc.)

What do you expect to gain from joining this Society?

Please forward this application form by email to Miki Chie chierin@mb2.seikyou.ne.jp
Applicants without email access, please post it to the following address:



執筆要領

2005 年 8 月制定

2006 年 6 月改定

2009 年 3 月改定

日本語ジェンダー学会
学会誌編集委員会

1. 言語

- ・ 投稿原稿は日本語または英語で執筆する。

2. 内容区分

- ・ ①研究論文、②研究ノート、③書評、④短信のいずれかとし、それを明記のうえ投稿すること。未発表のものに限る。
 - ① 研究論文：当該分野において、先行研究に加えるべきオリジナリティのある研究成果が論理的に述べられているもの。
 - ② 研究ノート：萌芽的研究を含めて、今後の研究の基礎となる要素、あるいは今後、優れた研究論文に発展していく要素をもつもの。
 - ③ 書評：当該分野の研究にとって価値ある文献に関する書評。
 - ④ 短信：当該分野の研究にとって価値ある情報に関する報告。

3. 用紙・ページ設定・分量

- ・ 文書はA4サイズとする。1 ページは、40 字×40 行とする。余白は上、下、左、右とも 25mm とする。
- ・ 原稿の分量は、研究論文の場合は、上記設定において、和文・英文原稿ともに 7 ページから 8 ページ（和文の場合、12000 字程度）を目安とする。また、研究論文以外については、6000 字から 8000 字程度を目安とする。ただし編集委員会の容認や指示がある場合は、この分量制約に拘束されない。

4. 査読基準

- ・ 上記内容区分のうち、①研究論文、②研究ノートについては、下記の観点から査読を行う。
 1. 当誌『日本語とジェンダー』への適合性
 2. 独創性（当該研究領域への貢献）
 3. 先行研究の把握、論理性・実証性
 4. 論文の構成
 5. 表現の明解さ・読みやすさ
- ・ なお 1 に関しては、当誌の趣旨は、日本語の言語表現・言語現象の分析を通して社会的概念で

あるジェンダーを論じるところにある。また、投稿論文に関して、内容区分を変更した上での修正を編集委員から依頼する場合もある。

5. 投稿締切

編集委員会で決定する。

6. 投稿先

投稿原稿は、学会誌編集委員長に郵送等によって送付する。

7. 採否について

投稿された原稿の採否は、当誌編集委員会が決定する。

8. 投稿原稿作成上の注意

8. 1 文書作成ソフト

- ・ 文書作成ソフトは、Word 文書か、または Word 文書と互換性のあるソフトで作成すること（例えば、Word2000 以上、OpenOffice1.12 以上など）。後者の場合は、変換した Word 文書ファイルを提出すること。

8. 2 箇条書き

- ・ 文頭の番号、点、文字などは、オートコレクト機能を使用せずに直接入力すること。

8. 3 図表

- ・ 図表は文書の中に入れること。
- ・ 図はイメージデータが望ましい。また、表は Word の罫線を使って作成することが望ましい。
- ・ 図表が本文中にうまく納まらない場合は、別のファイルとして事務局に送付することも可とするが、その場合は、それらの図表の仕上がりについては事務局に一任すること。

8. 4 注と参考文献

- ・ 注と参考文献・引用文献は、なるべく後ろにまとめる。注は本文中に上付添字として示す。

8. 5 査読用のファイル

- ・ 査読用に、完成論文から、最初の「氏名」と最後の「氏名ふりがな・所属・連絡先」を除いたものを「査読用ファイル」として、完成論文のファイルといっしょに提出すること。

8. 6 連絡先のファイル

- ・ 原稿タイトル、著者氏名（よみがな）、所属、連絡先（住所・電話・メールアドレス）を記したファイルを、完成論文といっしょに提出すること。

8. 7 論文サンプルのファイル

- ・ タイトル、名前、要旨、章節立て、注、参考文献の書き方等については、「原稿サンプル・ファイル」に倣うこと（原稿サンプル・ファイルに上書きして原稿を書くことをおすすめる）。

9. 投稿の際の提出物（以下の4点）

- ・ 完成論文をプリントアウトしたもの。
- ・ 完成論文ファイル（論文タイトルをファイル名とすること）
- ・ 査読用論文ファイル（「査読用・論文タイトル」をファイル名とすること）
- ・ 連絡先ファイル

2005 年 8 月制定

2006 年 6 月改定

2009 年 3 月改定

日本語ジェンダー学会

学会誌編集委員会

1. 言語

- ・ 投稿原稿は日本語または英語で執筆する。

2. 内容区分

- ・ ①研究論文、②研究ノート、③書評、④短信のいずれかとし、それを明記のうえ投稿すること。未発表のものに限る。
 - ① 研究論文：当該分野において、先行研究に加えるべきオリジナリティのある研究成果が論理的に述べられているもの。
 - ② 研究ノート：萌芽的研究を含めて、今後の研究の基礎となる要素、あるいは今後、優れた研究論文に発展していく要素をもつもの。
 - ③ 書評：当該分野の研究にとって価値ある文献に関する書評。
 - ④ 短信：当該分野の研究にとって価値ある情報に関する報告。

3. 用紙・ページ設定・分量

- ・ 文書はA4サイズとする。1ページは、40字×40行とする。余白は上、下、左、右とも25mmとする。
- ・ 原稿の分量は、研究論文の場合は、上記設定において、和文・英文原稿ともに7ページから8ページ（和文の場合、12000字程度）を目安とする。また、研究論文以外については、6000字から8000字程度を目安とする。ただし編集委員会の容認や指示がある場合は、この分量制約に拘束されない。

4. 査読基準

- ・ 上記内容区分のうち、①研究論文、②研究ノートについては、下記の観点から査読を行う。
 1. 当誌『日本語とジェンダー』への適合性
 2. 独創性（当該研究領域への貢献）
 3. 先行研究の把握、論理性・実証性
 4. 論文の構成
 5. 表現の明解さ・読みやすさ
- ・ なお1に関しては、当誌の趣旨は、日本語の言語表現・言語現象の分析を通して社会的概念であるジェンダーを論じるところにある。また、投稿論文に関して、内容区分を変更した上での修正を編集委員から依頼する場合もある。

5. 投稿締切

編集委員会で決定する。

6. 投稿先

投稿原稿は、学会誌編集委員長に郵送等によって送付する。

7. 採否について

投稿された原稿の採否は、当誌編集委員会が決定する。

8. 投稿原稿作成上の注意

8. 1 文書作成ソフト

- ・ 文書作成ソフトは、Word 文書か、または Word 文書と互換性のあるソフトで作成すること（例えば、Word2000 以上、OpenOffice1.12 以上など）。後者の場合は、変換した Word 文書ファイルを提出すること。

8. 2 箇条書き

- ・ 文頭の番号、点、文字などは、オートコレクト機能を使用せずに直接入力すること。

8. 3 図表

- ・ 図表は文書の中に入れること。
- ・ 図はイメージデータが望ましい。また、表は Word の罫線を使って作成することが望ましい。
- ・ 図表が本文中にうまく納まらない場合は、別のファイルとして事務局に送付することも可とするが、その場合は、それらの図表の仕上がりについては事務局に一任すること。

8. 4 注と参考文献

- ・ 注と参考文献・引用文献は、なるべく後ろにまとめる。注は本文中に上付添字として示す。

8. 5 査読用のファイル

- ・ 査読用に、完成論文から、最初の「氏名」と最後の「氏名ふりがな・所属・連絡先」を除いたものを「査読用ファイル」として、完成論文のファイルといっしょに提出すること。

8. 6 連絡先のファイル

- ・ 原稿タイトル、著者氏名（よみがな）、所属、連絡先（住所・電話・メールアドレス）を記したファイルを、完成論文といっしょに提出すること。

8. 7 論文サンプルのファイル

- ・ タイトル、名前、要旨、章節立て、注、参考文献の書き方等については、「原稿サンプル・ファイル」に倣うこと（原稿サンプル・ファイルに上書きして原稿を書くことをおすすめする）。

9. 投稿の際の提出物（以下の4点）

- ・ 完成論文をプリントアウトしたもの。
- ・ 完成論文ファイル（論文タイトルをファイル名とすること）
- ・ 査読用論文ファイル（「査読用・論文タイトル」をファイル名とすること）
- ・ 連絡先ファイル

編集後記

『日本語とジェンダー』13号は、東京での年次大会とウクライナでの国際大会における講演・発表等の要旨に若手研究者の実証的研究を加え、いつもと同様、多彩で豊かな内容を含むものとなった。本学会は、ジェンダーという切り口から人間と社会の営為を幅広く虚心坦懐に眺めてみる場として設立されたものであるが、その前提として、誰にとってもより生きやすい社会の実現に寄与したいという願いがあったことは言うまでもない。13号の巻頭を飾る樋口恵子氏の講演要旨の中にある「女も男もあるがままでいられる表現を」という言葉は、本学会の基本的な立場を実に鮮やかに示している。一定以上の年齢の読者には、樋口恵子氏の活動や著作がどれほど日本の女性を勇気づけ、両性にとってより伸び伸びと生きられる社会の実現に寄与してきたかを説明する必要はないと思うが、昨年の基調講演を直に聞く機会を失した人々にも、貴重な御講演の要旨を伝えることができたことは編集者一同にとって大きな喜びである。本学会が、樋口氏をはじめ先達の貢献をさらに発展させる一つの大きな力となって今後も働いていくことを祈る。

(第13号編集委員長 因 京子)

*10号から4号に亘って因京子が編集委員長を務めてまいりましたが、次号から新編集委員長に交代します。御投稿くださった皆様、編集に御協力くださった皆様、また、とりわけ、本誌の読者に、心から御礼申し上げ、次号にも積極的に御投稿くださるようお願い致します。

編集委員（*は委員長）

小川早百合、門倉正美、斎藤理香、*因京子、日置弘一郎、渡部孝子

査読協力者

佐々木瑞枝

日本語とジェンダー 第十三号

2013年6月発行

編集者 日本語ジェンダー学会
学会誌編集委員会

発行者 日本語ジェンダー学会

〒194-0294 東京都町田市常磐町 3758 番地
桜美林大学 リベラルアーツ学群
穂田研究室

TEL 042-797-9421

E-mail jimukyoku@gender.jp

ISBN 4-9900828